

準備期間をおいてから日本国召喚

レシプロ至上主義者

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

平和ボケした今の日本では生き残れないのでは？ 神々（崇り神、悪神、戦神）は訝しんだ。

以下、真面目なあらすじ――

遙か昔に行われた大日本帝国による異世界への兵力派遣。その対価として日本は異世界への転移が約束された。

しかし日本が平和国家になってしまった事を知った神々は、異世界召喚までに準備期間を与えた。戦乱に満ちた世界へ対応するための準備期間を。

試練を乗り越えた日本は、いくつか問題を抱えながらもどうか神が想定した異世界で生き残っていける力を手にした。

なお神が想定していたのは難易度ハードの世界で転移先の異世界はイーजीモードだった模様。

塩漬け状態の小説をそのまま投稿しました。

更新についてはかなり怪しいです。

目次

転移の日、試練の日	1
石を蹴飛ばし、友を得る	6
次へ向けて・一步	15
次へ向けて・二歩	22
次へ向けて・終歩	29
階段を踏みしめて・4段	36
階段を踏みしめて・9段	47
階段を踏みしめて・13段	60
日本式大陸掃除	67
ゴミ捨てからの歓待準備	75

転移の日、試練の日

2015年、日本は突然特殊な空間へ飛ばされた。

周囲が雲の壁に覆われたそこがどこなのか、理解したのは2日目のことであった。

壁が消え去ると同時に日本本土から200Km東に進んだ位置に出現した陸地から多数の航空機が日本に向かって飛び立つのをレーダーで確認した。

スクランブルに上がった自衛隊機が接近するやいなや、国籍不明機は問答無用とばかりにミサイルを発射した。

この運命の日から、日本のつらく苦しい試練の日々が始まった。

2020年8月15日。終戦記念日のこの日、日本は再び異世界へ転移した。

国内に混乱はなかった。神がやんごとなき御方を通して、だいぶ前から今日再び転移が起きることを伝えていたからだ。

転移して即座に周辺海域調査のための哨戒機が多数飛び立ち、総理の演説が始まる。

「国民の皆さん。陛下のお言葉にもあつたとおり、我が国は2度目の厄災に見舞われようとしています。真摯に平和を願う我々に躊躇なく暴力を振るい、人類が理性を持って封じるべき大量破壊兵器すら小石でも投げるかのように使う、度し難い野蛮人が溢れかえった世界に、我々は再び送り込まれたのです」

「我が国が初めて転移を経験したときに生まれた地獄、国民の皆様方もご存じ、第2次大戦以来となる本土への攻撃で多くの無辜の民衆が殺されました。幸いにも僅かに存在した理性と良心を抱く人々と力を合わせて平和を勝ち取ることが出来ました。転移以前の豊かな社会を取り戻したとは到底言えぬ現状が続いております」

「皆様の中には恐れていらつしやる方もいるでしょう。またあの地獄が来るのか、まだ苦しい生活が続くのかと。このままでは我々は理

不尽な暴力と悪意の前に跪き、滅び去ってしまうのではないかと。その懸念に対し我々、日本政府はお約束します。今後我が国に降りかかるといかなる厄災も我々は確固たる意思で日本を、国民の皆様方を守り、そして元凶を撃滅することを。再び日本を懐かしき飽食の時代に回帰させるべくあらゆる手段を行使することを！」

「国民の皆様には落ち着いて、安易な行動は控えたうえで日本を維持するための労働に励んでいただければと思います。遠からず調査のために危険な飛行任務に赴いた哨戒機から情報が得られるでしょう。どのような存在が立ちふさがろうとも、日本政府は断固たる態度をとり、立ち向かう方針です」

総理の演説の終わりと共に日本各地で拍手と歓声が湧き起こる。

日本本土の人間と日本人となった外地の人間達は、新しい世界に大きな不安と敵意を抱きながら新たな日常を迎えた。

クワ・トイネ公国及びクイラ王国と国交を結んでから1ヶ月。

首相官邸に集まった国家首脳部の面々は困惑していた。

具体的にいうとクワ・トイネとクイラとの関係と彼らの行動に困惑していた。

「……………つまり我が国に対する開戦に向けた動きはないと？」

「はい、国内テロのための工作員を送り込もうという動きもありません。諜報員と思わしき人間は領事館等の周囲で複数確認されていますが、それだけです。身代金目的の誘拐や技術狙いの拉致なども起きていません」

「つまり結論から言って極めて平和的、と」

「その通りです」

総理は大きく息を吐き出し、気が抜けたような表情を浮かべる。

2度目の異世界への転移もそうだったが、異世界国家との接触もイレギュラーの連続であった。

問答無用の宣戦布告無しでの攻撃や外交官を人質にした脅迫、工作員による破壊活動や不穏分子を使ったテロ。これまで日本を苦しめて

きた攻撃が、この世界では全く行われない。

「笑顔で騙して外套に隠した短剣でグサリ、ということもあつたがその可能性もないんだな？」

「それならばその前兆を掴めるはずです。それが無い、ということやはり可能性は低いというのが情報分析組織一同の結論です」

表面上は仲間面をして、隙を見て一撃を加える。そのような卑劣な行いをする異世界国家は珍しくなかった。

故に増強された対外情報組織に両国の動きを探らせていたのだが、そちらもなんの動きも見られない。組織が買収された可能性も疑つたが、そちらも白だった。

「総理、この2カ国よりも、西のロウリア王国に注視すべきです。この国は我々もよく知る典型的な蛮族国家です。ひとまずクワ・トイネ、クイラ両国は置いておき、こちらに対処すべきです」

亜人絶滅という実に分かりやすい「敵」の看板を掲げている国。敵であるが故に、これまで通りのやり方が通用する相手であるためどう対処するかはもう決まっていた。

即ち、先制攻撃による戦争の主導権の確保。

「部隊の展開状況は？」

「既に海軍の空母打撃群が出航、ロウリア王国のEEZ手前で待機しています。……この世界に排他的経済水域はないようですが、後世のことを考えた結果、念のための処置です」

「空母まで出す必要があるのか？ ミサイル駆逐艦の巡航ミサイルで十分だろうか？」

ベトナム戦争のころならともかく、現在なら水上艦艇もミサイルによる長距離対地攻撃が可能だ。

空軍が大陸に展開していないことから、エアカバーを得るには空母を出すしかないが、時速500Kmも出せない空飛ぶトカゲの群れ相手に超音速ジェット戦闘機の援護などいるはずもない。

空襲はイージス艦、及びデータリンクした駆逐艦とフリゲートの対空ミサイルで防ぎきれ、攻撃もミサイルを数発撃つだけなのに、動かすのも高価な空母を出す理由が分からなかった。

「対ワイバーン戦闘のデータを集めるためです。機械ではなく生物相手ですから、ミサイルの誤作動などが考えられます」

ワイバーンを始めとする生物相手にもきちんと動作する改修は既に全ての対空ミサイル——主に赤外線短距離ミサイル——に施されている。

しかし実戦で予想通りの効果を発揮するかは分からない。なので、この戦争で実地試験を済ませるつもりなのだ。

「そういう理由ならば仕方がないな。だが早めに終わらせてくれ。ロウリアだけで終わる可能性は低い。ここであまり金をかけたくない」

「もちろんです。ただでさえ各種ミサイルの改修や衛星打ち上げで予算を取られていますから」

防衛大臣改め国防大臣は総理の言葉に同意する。

実際、日本の予算の少なくない額が、復興予算を除けば宇宙ロケット関連に回されている。転移した惑星の大きさに合わせた飛行コースの修正、転移とともに失われたGPSなどの軍事に限らず国家経済の維持に欠かせぬ機能の復活などに投じられている。

事前に知らされていた転移に合わせた衛星打ち上げ計画はあったが、それは惑星の大きさが地球と同じだと考えられていた時期の計画だ。トラブルを見越して建てられた、ある程度スケジュールに余裕をもった計画とはいえ遅延は避けられない。

加えて、これまでの経験からロウリア王国を打倒したあと、次なる侵略国家との遭遇の可能性は極めて高いと政府と防衛省は見積もっていた。

ロウリア如きに大きく体力を使う余裕はないのだ。

「現地の諜報員からの情報とクワ・トイネ、クイラ両国が寄越した資料を基に分析したところ、首都の城にいる国王を潰せば内乱が勃発する可能性が高いそうです。クワ・トイネと関係が深い諸侯を通じた懐柔と切り崩しも実行します」

「定番だな。いいだろう、関係各所にはそのように伝えてくれ。……ああ、そうだ。使えそうな諸侯、特に沿岸部を統治している連中

で使えそうなのをリストアップしてくれ。人間はいらんが、土地は欲しい」

ロデニウス大陸の地図を眺めながら総理はつぶやく。

「米国式プラス中華式海外権益拡大術だ。精々、有効活用させてもらう」

総理は地球でアメリカと中国がやったことを日本流にアレンジしつつ異世界相手に実行するつもりだった。

石を蹴飛ばし、友を得る

『先ほどロウリア王国がクワ・トイネ公国、クイラ王国2ヶ国に宣戦布告。両国との安全保障条約に基づき、我々はこれより積極的防衛行動を開始する』

空母あかぎ——国防軍に改変しても、ついに艦艇名は漢字表記にはならなかった——以下イージス艦2隻、駆逐艦3隻、フリゲート4隻からなる第7艦隊の全スピーカーから作戦開始が告げられる。

「対木造装備の攻撃隊、いつでも出撃可能です」

「よし、攻撃隊発艦はじめ」

サーモバリック爆弾を搭載した艦上戦闘機がカタパルトによって順次発艦していく。

艦橋から発艦風景を眺めている士官の1人がぼやく。

「……いい飛行機なのは認めるが、じっくりこないな。いまどきF—4が主力っていうのは」

神々の試練を乗り越えて軍事大国となった日本の空母艦載機主力がF—4——正確にはその類似機——というのは違和感を抱くかもしれないが、日本としてもやむを得ない事情があった。日本というより海軍の、だが。

複雑怪奇なる事情と経緯を経て連合国家となった日本。併合、あるいは条約への加盟により共同体となる国が増えるごとに、その国にあった艦載機の製造工場やメンテナンスセンターなどが手元に転がり込んだのだが、その機種に問題があった。

大半がかつての仮想敵国が使っていた陸上機改造の艦載機そっくりで、旧同盟国似の機体は日本でも退役した老兵と金のかかる可変翼の俳優しかなかった。ほぼ同じ設計で三役こなすステルス機なんて試作機しかない。

もう一種、垂直離着陸できる変態飛行機があったが主力としては性能不足として外されている。

維持費用と性能が釣り合っていない俳優は満場一致で外され、財布のひもと軍の手綱を握る連中は改造艦載機を勧め、海軍は老兵で凌いで

ステルス機の完成まで待つことを望んだ。

金と面子と感情入り混じる論戦の末、機体とそれを扱う人間が最低限は揃っていた老兵ことF-4モドキが当座の空母航空隊主力を務めることとなった。今後は機種転換訓練が進み次第、改造艦載機に置き換えられていく。

ステルス機は艦載機型を第1、垂直離着陸型の開発を第2に優先し、通常型は白紙とされた。理由は、空軍は既に高性能なステルス戦闘機が存在しているため。垂直離着陸型は亜音速ながらVTOL戦闘機があるためだ。

閑話休題。

発艦を終え、編隊を組んだ攻撃隊24機は一路ロウリア艦隊で実地試験を行うべく亜音速で目標まで向かう。

ロウリア王国が用意した4000隻を超える空前絶後の大艦隊。艦隊を率いる海将シャークンはひとりごちる。

「勝ったな」

慢心からくる言葉ではなく、彼が今持つ情報を基に判断した客観的な事実である。

クワ・トイネ公国、クイラ王国の艦隊全て集めてもこちらの足元にも及ばない。日本という国も参戦しているかもしれないが、新興国家の海軍など戦力になるはずもない。

揺るがぬ自信をもって進軍する艦隊に黒い影が数個降ってくる。甲板あるいは海面に着弾したそれは巨大な火球となり、衝撃波が発生する。

追い打ちをかけるように降ってきた影は無事だった船団を焼き払い、吹き飛ばす。船が無事でも水夫が肺を焼かれるか内臓を潰されるか海に落とされて戦闘不能となるケースが相次ぐ。

「なんだ!?! 伝説の神竜のブレスか!?!」

流石に数が多いので全滅は免れたが、今度は上空から光の雨が降り注ぎ船を粉々にする。

空からの攻撃といえばワイバーンのブレスしか知らないロウリア兵たちは右往左往するばかり、ごく一部にバリスタで反撃を試みる勇者もいるが敵が速すぎて当たらない。

こんなとき混乱をまとめ上げるべき将校の内、海将シャークンは最初のサーモバリック爆弾の爆風により戦死。生き残った将校も状況確認に精を出している間に焼肉かひき肉にされるのを繰り返している。

攻撃隊が去った後、ロウリア海軍は1000隻を超える損害を出しながらも前進を続けた。

臨時の指揮官が艦隊の状況把握に追われて撤退命令を出せる状況にないことと、ここで逃げても家族共々殺されるか、海賊に身をやつすしかないことを末端の水兵まで理解していたからだ。

それでも流石に無策で突っ込むほどロウリア王国海軍の将校は蛮勇でも愚昧でもなかった。

「今すぐワイバーンを寄越してくれ！ このままでは全滅してしまう!!!」

まだ生き残っていた将校が魔信で本国のワイバーン基地に援護を要請する。

彼自身、さつきまで頭上を飛び回っていた怪物にワイバーンで太刀打ちできるとは思っていない。敵がワイバーンを相手にしているうちに少しでも敵地か敵艦隊がいるところに近づければいい。そう考えていた。

かくして日本の狙い通り、ワイバーン24騎が艦隊上空援護のために派遣される。

ロウリア艦隊から120Km離れた位置を周回するその機体は、ターボプロップエンジンで6翅のプロペラを2つ回しながらロウリア艦隊と援護のワイバーン編隊をレーダーで監視する。

監視者の名はE-38Aレッドアイ艦上早期警戒機。

転移以前に導入されたE-2C早期警戒機の後継機として採用さ

れた本機は当然のごとく(嫌々ながら)併合した他国の航空機であり、艦載機としても運用できる。レーダーの探知距離はE-2Cとあまり変わらないがデータの処理能力などが向上しており、また電子機器以外ではキッチン・トイレ・仮眠室の設置など乗員の負担軽減に力が注がれている。

「敵編隊補足、数24。間違いありません、ワイバーンです」

「データ送信は？」

「問題ありません」

データリンクによりE-38Aが得た情報は即座に第7艦隊に送られ、空母から準備していたF-4が4機発艦する。

敵は現代航空戦の基準では目と鼻の先にいるため増槽は積まずに試験用の対空ミサイルのみを搭載し、間もなく自機のレーダーでワイバーンを補足する。

「これよりミサイルの実戦における動作試験を開始する。各機、事前の打ち合わせどおりに行え」

搭載されたミサイルは2種類。レーダー誘導の中距離用と赤外線探知誘導の短距離用。

ミサイルの数は十分にあるため、12発ずつ撃ち込むことが決まっている。

「FOX1」

発射命令と同時に中距離ミサイル——誘導装置のみ取り換えた在庫処理用の旧式——がパイロンから切り離され、ロケットモーターで加速しつつ目標へと飛翔していく。

1分も待たずに、空に12個の黒煙の花が咲いた。

「次、FOX2」

半分となった敵に再び期限切れ間近の12本の白線が向かっていく。

結果は先ほどと同様。整備と幸運に支えられたミサイル、故障による不発などは一切なし。

「全弾命中、試験終了を宣言する！……今年の漁獲量には期待できそうだ。全機、帰還するぞ」

下界では焼けた肉と焦げた肉、そして空から降ってきた生肉という恵みに肉食魚たちが食らいつついるのを気にもせず、彼らは母艦へと帰っていく。

片道30分もかからない距離を戻った彼らは、旧式ゆえに自動着艦装置もないF-4を見事に操り、最後にあかぎに降りた隊長は格納庫で整備長に声をかけられた。

「おかえりなさい。上の連中のわがままにつき合わされて、ヒヤヒヤしたでしょう?」

「なーに、整備の連中がすっかり仕事してくれてたから怖くはなかったさ。それに最後のご奉公にはよからう。なあ爺さん?」

隊長は愛機をポンと叩く。

いろいろと不便なところは多いが、それでも長年つきあってきた飛行機だ。

『しののめ、あきぐもによる対地攻撃開始。第2次攻撃隊の攻撃が終わり次第、本隊のフリゲートと駆逐艦を一部分離し、敵艦隊への追撃を行う』

「おっ、始まったか」

駆逐艦のVLSから巡航ミサイルが発射されたことが全員に知らされる。

白煙の尾をしばらく引いたあと、設定されたコースのとおり低空を飛んで水平線へと消えていく。

クワ・トイネ公国並びにクイラ王国の間諜、そして日本の諜報網が集めた情報からロウリア国王の居場所の見当はついている。

発射された巡航ミサイル、8発。王城を含めた重要な軍事施設を破壊するのに十分な数だった。

開戦したとはいえ、戦禍から離れた王都は活気があるものの、概ね平穏な空気で満たされていた。

突如鼓膜に響く、王城と飛竜基地から轟いた雷鳴の如き爆発音。

「な、なんだあつ!!」

「城が……！ 火に包まれてる!!!」

「あつちには飛竜厩舎が！ 俺の息子があそこで働いてんだ！」

平和な後方から一転、戦場と化した王都は怒号と悲鳴が飛び交う。衛兵たちが混乱を収めようと動くが、王都全域が動揺しつつあるなかでは意味をなさない。恐怖と混乱は無秩序な暴動へと発展し、落ち着きを取り戻すころには爆撃よりも暴動のほうの被害が大きいほどだった。

開戦から1日も経たずに、ロウリア王国は崩壊への一步を踏み出した。

「——ロウリア王国への斬首作戦は成功しました。以降はクワ・トイネ公国、クイラ王国とともに各地の諸侯へ切り崩しを行います。ああ、それとクワ・トイネ公国から要望のあったギム近郊の敵兵団の殲滅ですが、これには本土から空軍の爆撃飛行隊を差し向けているので、明日の午後には戦果確認を終えて報告がくると思います」

「よろしい、満足いく結果だ」

総理の締め言葉とともに、この場にいる者たちの中でロウリア王国は過去のものとなった。

あとは現実が彼らの認識に追いつくのを待つだけだろう。

「あとは外務省と協力して国益確保に努力してもらおうとして……」

国防大臣」

「はい」

「広島計画は怎么样了のかね？」

広島計画。

原子爆弾によって焼き払われた土地の名を冠するこの計画。日本の原子力の軍事利用に関わる全てがこの計画のもと進められている。「各種弾道ミサイルと巡航ミサイルの核弾頭部設計並びに製造は完了しました。あとは実験を残すのみです」

「早いな。広島計画が始まったのは3年前だぞ？」

「いずれも、実物と技術者が手元にありますからね。我が国の技術

者曰く、少し改良しただけだとか」

日本が試練を通じて得た「戦利品」は多岐にわたる。

その中には当然の如く、核ミサイルとその技術者も含まれていた。「実物はほとんどスクラップだったろうに、よくコピーできたな」

そして鹵獲品の運命として、無事なものよりスクラップ同然のもののほうが、圧倒的に多かった。

もし技術者があまり確保できていなかったら、広島計画は完了に10年以上かかっていたという試算が国防省から出たほどだ。

「何はともあれ、かけた金に見合った成果が出たことは喜ばしい。それで？ 起爆実験は新内地のどこかか、クイラ王国か？」

新内地とは1度目の転移後に起きた戦争で日本に編入された土地を指す。

地政学上の要衝や資源地帯などを押さえたあとはさっさと独立——当然、経済的植民地にしたうえで——させてしまおうとしていたが、現地住民の声など複数の要因から都道府県名に組み込まれて、日本国の一部となっている。

「残念ながら、実験の用途は立っていません。この星の海流や風の流れなど、分かっていることが多すぎます。下手に実験を急いで本土が放射能汚染にさらされては本末転倒です」

「……試験もしていない兵器を配備するなどできんな。核の自力生産はまだ先か」

「広島に落とされたものと同程度の核爆弾なら、新内地の土地で、すぐ実験できますが……。あまり意味がありません」

「載せる爆撃機がほとんどないうえに、威力も低すぎる。そんなものに金をかけるなら、安全に実験できる場所の確保に人と金を注ぐべき……当然だな。ああ、それとプラットフォームもな」

総理の言葉が、今の日本がまだ核武装できていない理由の全てだった。

鹵獲品もあるが、補充が利かない上に多くはサンプルとしての価値が高い。日本人のもつたいない精神もあって使われる可能性は低い。

「まあ、しばらく使う機会のなさそうな兵器は置いておくとして、

だ。クイラ王国との交渉はどうだ？」

「こちらは順調です。向こうも使い道のない土地を貸すだけで金が入ってくるかと大喜びだそうです」

「結構。クワ・トイネ公国のほうは？」

「こちらはオフレコですが、了承すると返事がきています。後日、正式な書類が大使に手渡されるでしょう」

ロウリア王国戦以前から、日本は両国にある提案を持ち掛け、交渉していた。

クイラ王国は石油などが産出しない砂漠を貸し出し、そこを使わなくなった鹵獲兵器類保管場所にする。

クワ・トイネ公国は不要な土地に軍民共用の空港を建設し、戦争となったらそこを日本に貸し出すこと。

両国が差し出すのは土地のみで、建築費や維持費は基本的に日本が持ち、しかも日本がその土地を使用している間は金が入ってくるというこの儲け話に、どちらからも好感触が返ってきていた。

なおクイラ王国の砂漠で核実験を行うつもりは、日本政府にはない。放射能汚染もそうだが、異世界に余計な情報が洩れるリスクを避けるためだ。

「クワ・トイネ公国政府並びにクイラ王国政府、共にこの施設から得られる資金で近代化を我が国に依頼したいそうです」

外務大臣からの報告に閣僚の視線が彼に集う。

「近代化？ 兵器の輸入とかではなく？」

「はい。それと、安全保障条約の締結も進めたいと。……それもこちらの提案した内容を、ほぼそのまま受け入れる、と申しております」
ロウリア王国の情報を得た時点で、日本は両国に日米安保条約に近いものを、大使館を通して提案していた。ロウリアの開戦が早かったことと、国内の意思統一に時間がかかったために戦争には間に合わなかった。

「外務大臣。確認したいのだが、彼らは今日、我が国がロウリア王国を潰したことを知っているのかね？」

「それはないかと。彼らの通信技術は文明不相応に発達しています

が、上層部に伝わるのには2週間程度はかかるでしょうから」

「そうか……………金のなる木から得た金を無駄遣いせず、富国強兵に邁進すると。そして自分から菓子折り携えて、お願いしてきたと。……………久しぶりだ。1戦も交えず、礼儀をわきまえた国を相手にするのは」

心から感心した様子 of 総理。彼はこの報告で、クワ・トイネ公国とクイラ王国が日本の友好国となったと認めた。

「諸君、喜ばしいことに新しい友人2名は、旧世界の周辺諸国や転移世界の蛮族どもに爪の垢を煎じて飲ませてやりたいほど、勤勉で誠実なようだ。——ならば誠実と信頼を第一とする我々はそれに応えるべきだと思うのだが、どうか？」

総理の言葉に皆、笑顔で頷く。

彼らも総理とともに喜んでいた。武力による裁きを受けた、その様を見たわけでもないのに礼儀正しく願い出てくる、常識を持った国家を味方に出来たことを。

次へ向けて・一步

ロウリア王国を1つにまとめていた楔が無くなったことで分解しつつあるなか、日本は晴れて同盟国となったクワ・トイネ、クイラ両国に近代化ロードマップを提示。

これを受け入れた両国は急速に、だが国内に火種が生まれぬように発展していった。

一部趣のある建物を残しつつ、超高層ビルが建ち並び、アスファルト舗装の道路が国内の都市という都市を繋いだ。清潔な水がどこでも手に入るようになり、衛生面も改善された。

小中高に大学、憲法の発布と制度面の整備も怠らない。

国家の近代化に並行して進められる軍事支援も実施された。

まず陸軍。彼らはまず、他国への侵攻よりも自国防衛に適した能力を求めた。

クイラ王国は旧ロウリア王国勢力からの侵攻に備えて戦車、火砲の配備を進めた。また旧ロウリア王国領との国境に多数の防御陣地を構築し始めた。

クワ・トイネ公国はロウリア崩壊後多発する、国境絡みの問題に対処するためにジープ、トラック、ドローンに対人レーダーなど広範囲の監視と警備活動に必要な装備を導入した。

海軍は日本から鹵獲品の哨戒ボートなどを数隻供与されただけだった。高度な技術者の集まりであり、金食い虫の海軍を養う力は両国ともになかったのだ。

もつとも優遇されたのは空軍だった。ターボプロップの初等練習機にジェットの高等練習機。さらには予備機、部品に事欠かない、旧式かつ鹵獲だが超音速ジェット戦闘機をそれぞれ10機以上渡された。教官に加えて戦闘機運用に必要なスタッフまで完備である。

自国の予備戦力としてキープしたい日本の思惑による空軍への手厚い支援は、のちに『クワ・トイネ空軍とクイラ空軍は日本空軍の弟』と称されるほどの緊密な関係につながった。

クワ・トイネ公国公都クワ・トイネ。

日本企業によって建設されたホテルの最上階。内調などによる事前に“掃除”した部屋にて、訪クワした日本国総理大臣と外務大臣が雑談していた。

「やはりこの世界にはまともな国家が存在する。そのことを実感できただけでも、クワ・トイネ訪問には意味があった」

「……これまでが酷すぎたのかもしれませんが、なにせ、この世界の蛮族より下劣な国家が当たり前でしたから」

2人の脳裏によぎるのは1度目の転移先。ロウリア王国がただの悪ガキに思えるほど、吐き気を催す邪悪な国々。歴史上、地球に存在したあらゆる国家の黒い側面を煮詰めた敵は、日本国の考えを根本から叩き壊した。

その経験によって培われた疑心は未だ消えないが、少なくともまだ敵対していない、礼儀正しく付き合いを求め“人間”を殺しにかかるほど日本は、日本人は蛮族に堕ちていない。

「新しい友人たちとの付き合いは順調、素晴らしいことだ。……それはそうと外務大臣？ 彼らに着ける首輪の具合はどうかね？」

魔王の如き邪悪な笑みを浮かべた総理に、外務大臣も同じ笑みで答える。

「完璧です。インフラだけでなく、工業などの主要産業に食い込めています。これで彼らが噛みついてきても、早晚産業を餓死させられます」

日本はクワ・トイネ公国とクイラ王国に何をしたのか？

——戦後日本の生存戦略の1つ。世界の工業製品を日本製品なしでは成り立たないようにする。

これと同じ謀略を日本は仕掛けていた。

各種製造機械を作るマザーマシン。車両、船舶等に載せるエンジン、コンピュータ、e t c……。

一部の部品は作れる。なんなら製品の大部分を作れるように指導

してもいい。

だが中核部分は独占する。それは製品のみに限らず、それらの維持・管理・製造に必須の人員機材も、だ。

「いやはや先人には足を向けて寝られんな。こうして世界が変わっても我々のためとなる知恵を残してくださったのだから」

「全くです……。それと国防大臣の協力もあつて、両国政府閣僚を解放的にするアプローチ並びに航空機による人道的鎮圧を行えるようになりました」

解放的にするアプローチと航空機による人道的鎮圧。

どちらも名称を変えただけの、傀儡政権樹立クーデターとピンポイント戦略爆撃のことだ。

「もつとも、この様子では紙の上でどちらの計画も終わりそうですが」

「その方がいい。殲滅戦よりは安上がりとはいえ、金がかかることには変わりがないからな」

「次に外地権益の事です、元ロウリア王国の諸侯数名がこちらの話に応じました。遠からず権益を確保できるかと」

「条件は全て飲んだか？」

「ええ、こちらが拍子抜けするほど、あっさり」と

以前から進めていた裏工作が実を結びつつあった。

条件は相手の持ち物——日本が手に入れる価値あるものの多寡によって変わる。

共通している条件は、王都より北にある港を日本に200年租借するというもので、これと引き換えに日本の取引に応じた諸侯は支援とロウリア王国に課される——という予定になっている各種賠償免除の特権が与えられる。

「ただ、港に適した土地を持つていたのは1人だけです。他は全員内陸ですから、飛行場と農地と鉱山くらいですかね」

「ふむ……。まあ今回は最初だからな。こいつらが成功すれば、乗る人間も増えるだろう。引き続き工作を行いたまえ」

当初の目的である沿岸部の諸侯は1人だけだったが、総理はさして

気にしてはいなかった。

最初から全部思い通りに行くと思うほど、彼は子供ではなかったし、最後に日本が大きく黒字となるのなら過程はそこまで重要ではないからだ。

「最後に、次の敵が分かりました。パーパルディア王国です」

「新しい皇帝になってから無軌道な拡張政策に乗り出しているんだったな」

今日会談したクワ・トイネ公国のカナタ首相との話にも上がった国家の情報を、総理は脳内の引き出しから探し出す。

先代皇帝のころまでは横暴ながら話の通じる大国だったが、現皇帝のルディアスが即位してからは完全な覇権主義国家へと脱皮した。

現在では周辺国に蛇蝎の如く嫌われ、悪魔のように恐れられている。ついでにより上位の列強からの評価もあまり高くない。

「かなりの圧政を敷いているようですが、一方で現地民の分断などを行っていないという情報もあります。事実なら火事を起こしやしないと国防大臣も嬉しそうですよ」

「燃料代も節約できるし、君たち外務省もポストが増えると」

「必要なことでしょうか？ 資源があれば金蔓に、無くても敗戦国パーパルディアのお目付け役に出来る国をこちら側に引き込むのは」
いやまったくもってそのとおり、と総理は苦笑しつつも同意する。

外務省が国益に反しない範囲で組織の利益を追求するのは何も問題は無いし、そのために国防省と手を組むのもあたりまえの事だ。

「もうそろそろ寝かせてもらおうよ。明日にはクイラ王国で国王陛下への謁見、宰相閣下との会談だからね」

「では私も、安保条約の参戦条項についての会議があるので失礼します。……彼らクイラ王国もクワ・トイネ同様、こちらの首輪を気に入ってくればよいのですが」

「これより鹵獲兵器選別会議を始めます」

日本本土の国防省会議室にて、ある重要な会議が始まった。

試練によって多くの戦乱を経験した日本が抱える問題の1つに、鹵獲兵器の処理が含まれている。

親日的民間人に被害が出たり、反日的組織の手に渡ることを考えると、野ざらしにして放置しておくわけにもいかず、国内のあちこちに集積所を造り、そこへ集めている。

「陸戦兵器と航空機はある程度、クワ・トイネとクイラに売ることができます。ですが艦艇はしばらく彼らは必要としない。売れる相手もないこれらをどうするのか、それを決めていこうと思います」

クイラ王国に大規模な保管施設を建築することが決まり、陸上・航空兵器の大半はそこへ移されることが決まっている。

一方でそれができない兵器が存在する。軍艦だ。

その内約は

戦艦 52隻

空母 146隻

巡洋艦 430隻

駆逐艦 930隻

潜水艦 720隻

その他 魚雷艇など小型船、支援艦艇多数となる。

これだけ見ると米国を超えたように見えるが、当然そんなことはない。

まず、大半の船が旧式、というか時代遅れ。第2次大戦の軍艦はまあいい方で、中には第1次大戦相当の船も少なくない。

残りは近代化改装を施した第2次大戦から冷戦時代の船と既に国防軍へ編入された現代艦が6：4の割合で存在する。

今日、この場で論じるのは国防軍では使い道のない船の処遇だ。

「やはりスクラップが妥当では？ 場所も金もとるなら、少しでも意義のある使い方をすべきでしょう」

「遠方にはムーという国があるそうだろうか？ なんでも戦艦を運用してるらしいじゃないか、無論調査は必要だろうが、ふっかけてやれるんじゃないか？」

「まだ国交すら結んでいない国ですよ？　かなり離れているようですし、信頼に値するのかわ調べるだけでもどれだけ時間がかかるか……。分かるころには赤錆まみれになっているでしょう」

「近隣諸国にクワ・トイネとクイラムみたいに信頼できる国はないのか？」

「アルタラス王国という国が候補に挙がっていますが、パーパルディアの勢力圏に近いので引き込むにはもう一手欲しいところです」
軍人たちの会議は続く。

結論として、国防軍で使えない性能の船の内、状態の悪いものは全てスクラップ。状態の良いものは将来、他国への輸出用に保管されることが決まった。

元ロウリア王国の諸侯だった男は神と日本に感謝していた。

日本によって王国が崩壊し、混乱の中で王都に幽閉されていた息子が帰ってきた。

その息子から渡された日本からの書状。内容は脅し3割取引7割といったものであった。

王国を滅ぼした相手に思うところはあったが、王国崩壊による物流の混乱と他の諸侯の不穏な動きが重なったことと、取引の内容を信じれば、自分の懐から出すものがあまりないことから提案を飲むことを決めた。

それからは早かった。

日本の大きな商会——企業というらしい——が、王国が誇った大艦隊の拠点を超える規模の港を造り、領地にアスファルトという素材の道を張り巡らせた。それらの工事の際に企業は作業員として領民を雇ったので失業者が皆無に近くなり、犯罪も減って消費が増え、領地は活気づいた。

不穏な動きをしていた隣の諸侯も、日本からの援軍にあっさり返り討ちに遭った。最近、日本に講和を求めたらしい。

「……どうせなら、あの船に来てもらいたかったな」

執務室の窓から港を眺める。

そこには日本からの援軍であるミサイル駆逐艦が4隻埠頭へつな
がれている。より小さなミサイル艇などと共に派遣された彼らは、無
いに等しい諸侯海軍に変わって周辺海域の犯罪取り締まりを行って
いる。

今港に停泊している船が強いことはよく分かっている。

数日前、敵対している諸侯が送り込んできたワイバーン6騎を光の
矢をもって即座に撃ち落とすのをこの目で見ているのだから。

だがあの戦船の雄姿は男の心をつかんで離さず、脳に焼き付いてい
る。

——神竜を想像させる荘厳な巨体に収められた42cmという信
じられない巨砲。それを3門束ねた砲塔を4基背負い佇む様は、まさ
に黒鉄の城と呼ぶにふさわしい威容だった。

訓練を兼ねた親善訪問で一度訪れてそれっきりであり、滅多なこと
ではここに来ることはないだろう。あの船を呼び寄せる伝手も金も、
男にはない。

そこで男はふと思いつく。

日本に留学させる予定の息子が、あの戦船の精密な模型を売ってい
る企業が最近領地に出店したと話していた。

「模型で我慢するか」

執事に日本企業から戦船——戦艦やまとの模型を買ってくるよう
命じる。出来が良かったら、息子に見せて我慢しようかなと考えなが
ら。

これがきつかけとなり、後にこの領地は『ロデニウス大陸における
モデラーの聖地』と呼ばれることとなる。

次へ向けて・二歩

会談のため、クイラ王国に訪れた総理大臣。彼は到着早々、開かれた歓迎式典に参加していた。

真夏の日本とは違う、乾燥した猛暑に汗を流しながらも総理は笑みを絶やさずクイラ王国政府関係者と対談していた。

「続きましては、貴国より輸入したT-1戦車の行進です」

日本製アスファルトで舗装された道を履帯で踏みつけながら総理の眼前を横切っていく戦車たち。

丸っこい砲塔が特徴の、輸出品名T-1戦車。日本が鹵獲した戦車の1つで、複合装甲もない旧式だが、この世界では強力な主力戦車である。

「あれらは皆、我が国の兵士が操縦しています」

宰相の言葉のあと、戦車のハッチから獣の顔をした兵士——獣人兵が上半身を出し、総理達の居る席へ見事な敬礼をする。

「我が国から派遣された教官からも聞いています。貴国の兵士は皆、優秀な兵士として育ちつつあると」

「はい。おかげでもう間もなく我が国初の機甲師団が編成できま
す」

これまでクイラ王国で近代兵器を使いこなせるのは、日本から派遣された教導団だけだった。

だが今日、この場でクイラ王国人も機械兵器を使いこなせる。一人前の兵士になれると証明された。

このことは新聞だけでなく、クイラ王国の教科書にも1ページ使つて書かれることとなる。まさにクイラ人にとって歴史的快挙であったのだ。

「これは……………?」

会談場所に指定された、日本資本で建てられたホテル。

総理は手渡された資料とクイラ王国宰相とで目線を行き来させる。

そこには。

・クイラ王国は日本国が保管している戦闘機300機の購入を希望する。

- ・合わせてこれらを運用に必要な人材を日本から雇用する。
- ・有事の際にはこれらの部隊の指揮権を日本国に移管する。
- ・移管する部隊の規模は日本国と相談の上で決定する。
- と、あまりにも日本に有利すぎる提案が書かれていた。

「そこに書かれているように、我が国は貴国から戦闘機を購入したいと考えております」

「……貴国は既に我が国が供与した戦闘機があつたはずでは？」

クイラ王国はクワ・トイネ公国同様、M i g - 2 1 に近い鹵獲戦闘機が10機配備されている。

まだ現地人が単独操縦することはないが、年内には単独飛行過程に入ると報告を受けていた。

「たしかに。ですが、あの戦闘機は旧式の軽戦闘機。日本が想定している戦場では非力でしよう」

「供与した型はその通りです。しかし今後、輸出する予定の近代化改修型——C F - 1 B なら十分、活躍できます」

総理の言っていることは事実だった。

近代化改修型は、エンジンを原型からより強力なターボファンエンジンに換装し、電子機器は全て日本製に置き換わっている。その上、武装も試作ステルス戦闘機に搭載予定の25mm機関砲と各種日本製ミサイルが運用可能に改修された魔改造M i g - 2 1 モドキことC F - 1 B。

仮にベトナム戦争時の米軍戦闘機と戦えば完封勝利できるだろう。だが欠点もある。これだけ魔改造を施しても、元が小さいゆえの内部容積の小ささは誤魔化しきれなかった。燃料タンクが増設できないので航続距離を伸ばせず、新たに電子機器を載せることもできない。

電子機器なら主翼か胴体下にポッド式でぶら下げる、燃料は機体に貼り付ける形のコンフォーマルタンクという選択肢もあったが、いず

れも武装搭載量の減少や予算の都合などの問題で実現していない。

「それは重々承知しております。ですが……失礼を承知で言わせてもらえば、この戦闘機で古の魔法帝国——ラヴァーナル帝国の戦闘機相手に、互角に戦えるとは思えない」

クイラ王国宰相の指摘に、総理は言葉を詰まらせる。

異世界に転移してから、日本は情報収集を怠らず、荒唐無稽な内容でも法螺と切り捨てずに調査してきた。そのためラヴァーナル帝国がおとぎ話の存在ではないと確信している。

それゆえに宰相の言葉を否定できなかつた。最低でも魔法式のミスイルとジェット戦闘機、それも日本に十分通用すると思われるものを有している相手に、改造したとはいえ旧式機ではないCF-1Bが勝てるかは非常に怪しい。

「購入する戦闘機は一部に艦上戦闘機も含まれます。空母の銚である艦上戦闘機を扱う人員、費用ともに我が国が提供します。……さすがに部品と燃料はそちらで持っていたきたいですが」

急拡大で人員不足で苦しむ国防軍。特に苦しみのあまりのたうち回っている海軍にとって、クイラ王国からの提案は福音となるだろう。

空軍も海軍に引っ張られるパイロット候補の数が減るならもろ手を挙げて賛成するはずだ。

「それと、地上兵力も少しだけなら出せます。最前線は無理でも、他国領土を占領したさいの駐留部隊ならば我が国の兵でもこなせます」
航空兵力だけでも出血大サービスどころか失血死しそうだというのに、クイラ王国はさらに貢ぐと言ってきた。

取り込んだ母数が大きい分、多少ダイエツトしても陸軍はかなりの人員を確保できた。しかし守るべき範囲がそれ以上に増えたために、海軍、空軍よりはマシと言える状態ではなかつた。

クイラの部隊供出があれば、部隊のローテーションのやりくりがしやすくなり、敵地侵攻のハードルが下がる。

「……いずれも、大変ありがたい提案です」

総理は加齢で衰えつつも、悪辣さには磨きがかかってきた頭脳をフ

ル回転させる。

（クイラに張り巡らせた情報網からは今回の提案に関する情報は上がってない。情報が漏れなかったのは、宰相と国王含めた少人数で内々に決めたからだ。各大臣や軍部の説得しきれていないなら、そこに付け込める。それに国王回りへの諜報も強化しなければ……）

「貴国が我が国とともに、同盟に所属する国家の安全に貢献してくださるならば日本、クイラ、クワ・トイネはともにさらなる発展を遂げていくでしょう」

立ち上がり、握手を求める。

宰相も立ち上がって総理の手を握り返した。

「この条約が、我が国と貴国が真の友好国となる第一歩となることを願います」

異世界国家もなかなか侮れない。

胸にそう刻んだ総理は、笑顔を張り付けつつ握手した手に少しばかり力を込めた。

日本とクイラ王国が新たに結んだ条約の内容は、大使館を通じて即座にクワ・トイネ公国政府へと伝わった。

「駐クイラ大使からの連絡は確かだったようです。クイラは日本の関心を得ることに成功したようです」

「オイルマネーで潤っている彼らだからこそそのやり方だな……。ちなみに我が国に同じことは？」

「無理ですな。我が国も食料の輸出で儲かっていますが、彼らほどではありませんので」

活発な議論が行われる蓮の間。

静かな、だが白熱したそこへカナタ首相が一石を投じる。

「……ならば方向性を変えて売り込むとしましょう」

「首相、それは経済的な方向ですか？ 食料の値下げや関税率引き下げなどで関心を買うと？」

「いえ、それは国内からの反発も強いでしょうし、わが国最大の収入

源を削るのは避けたい。クイラは空軍をメインに売り込んだのでしよう？　なら我々は海軍を売り込みます」

蓮の間の面々は怪訝な顔をする。

「首相、海軍は技術者集団であり、一朝一夕で育成できるものではありません。あれだけ手厚い支援を受け取っている空軍でさえ、まだ単独飛行できるパイロットがいないのですぞ」

「分かっています。私も、何も今すぐ日本海軍のような大艦隊を用意しよう、などとは言いません。日本近海、最低でもロデニウス大陸近海の通商路防衛を担える海軍を創るのです」

カナタの傍にいた議員の眉がピクリとはねる。

カナタが言いたいことが分かったからだ。

「日本の海における軍事負担。その一部を肩代わりすると？」

「そうです。まあ技術と信頼からして10年単位でかかるでしょう。ですが、やる価値は大いにある」

力強く言い切ったカナタは海軍卿に顔を向ける。

「海軍卿に聞きたいのですが、私の言った海軍を目指すならどのような装備を日本に求めるべきですか？」

「通商路防衛だけならば、水上艦艇は駆逐艦とフリゲート、ミサイル艇で十分でしょう。航空機は対潜哨戒機・ヘリを拡充ですな」

「潜水艦は？　話聞く限り、いろいろと使い道がありそうですが……」

「潜水艦は特殊な船です。水上艦艇とは勝手が違いますし、日本側も潜水艦保有には神経をとがらせているようなので……」

「なるほど……では、潜水艦に関してはいずれにしましょう」

トントン拍子に進むカナタと海軍卿の相談。そこに予算を取り合う陸軍と空軍の責任者が口をはさみ、議論は深まっていく。

後日、この会議で出た結論は“クワ・トイネ公国海軍戦備計画”としてまとめられ、日本に提出されることとなる。

「やれやれ……。2国そろって媚び売り合戦だ」

「まあいいではありませんか。彼らが自腹で、かつ国家成長に悪影響を及ぼさない範囲で手伝うと言っているのですから」

国防装備研究庁。転移後の日本の変化と拡大に合わせて規模が大きくなった防衛装備庁を母体とする組織だ。

数ある研究室の1つで若手職員2人が休憩がてら、コーヒーを手に駄弁っていた。

「これからは兵器開発の目白押しですからね。ラヴァーナル帝国という十分な脅威の存在が確定していますし」

「核に加えてBC兵器が追加され、地上配備型ミサイル迎撃システム。航空機投下型機雷、さらには未完成の鹵獲空母の建造再開にそのコピーの建造。そしてそれと、これまで日本が蓄積した空母技術を基に10万t級の空母の研究、建造までもか……」

「その代償として純国産のF-3戦闘機開発は凍結。戦略兵器も爆撃機は新規の製造は中止、弾道ミサイルも以降はSLBMのみ開発を続行して他は研究に止める。艦艇も空母と航空揚陸艦、駆逐艦にフリゲート、それに原子力潜水艦以外は軒並み建造中止というわけですか」

「それと新型地上車両もだ。まあ工場ごと分捕った兵器を改良して配備したほうが安いしな」

使える金と資源には限りがある。全てにまんべんなく配っていたら、雀の涙ほどしか行き渡らない。ゆえに取捨選択をし、必要なところへ集中させる必要があるのだ。

余談だが、航空揚陸艦とは軽空母と強襲揚陸艦の機能を併せ持つ軍艦である。

最低でも排水量6万t以上の規模にして軽空母と揚陸艦、どちらの機能も十分に持たせる設計となっている。

「昨日も今日も、そして明日も残業ですわー……。新内地の人が入って人手不足は解消されたのに仕事はまったく減らないなんて……」

「だが、リストラの心配も、食いつぱぐれることもないんだ。ぼやかず仕事するぞ……おっと」

コーヒーを飲み終え、紙コップを捨てようと立った時、机に置いてある資料が崩れる。崩れたことで下から出てきた、一番新しい資料に目をついた。

「そういえば……こいつは完成間近だったな。どこかと戦争になったら、そこで実戦テストか」

輸送機投下型巡航ミサイルパレット。

真新しい資料には、近日中に試験場へと運ばれる兵器の名が記されていた。

次へ向けて・終歩

アルタラス王国国王ターラ14世は緊張していた。以前から極秘裏に進めていた日本との交渉、その最終段階に入っていたからだ。

「ではこの内容でよろしいですね？」

「うむ。契約書にあるとおり、わが国は日本国に対し土地の一部を300年租借する。その対価として、日本国は我が国に各種支援を行う。これをお願いする」

「承知致しました。陛下のご英断、首相にも必ずお伝えします」

自身のサインが記入された書類を鞆にしまい、日本の外交官はそそくさと退室していった。

それを見届けたターラ14世は腰が抜けたかのように、ドカツと勢いよく椅子に座り込む。

「ようやくか……」

「ここまで長かったですね。あとは……」

「パーパルディアに露見しないか、だな。……無事に彼が日本にたどり着けば、我が国はパーパルディア皇国の影響下から抜け出せる」

「陛下……言いたくはありませんが、頭の上の重しが日本に代わっただけではありませんか？」

臣下の言葉に何をいまさら、といった顔をするターラ14世。

「どちらも重しには違いない。だが日本は搾取するだけでなく、対価を提示した。それにより、我が国は間違いなく富むだろう。……ただ肥え太っていくだけの獣よりは万倍マシだ」

力関係で向こうが上である以上、搾取されるのは仕方がない。

だが日本は搾取するだけでなく、働いた分、支払った分の対価を出し、自分たちに過失があつたら責任を取るとまで言ってくれた。

その言葉を信じられるかは——特に最後——ともかく、ロウリア王国を一日で瓦解させた実力と、日本に鞍替えした旧ロウリア諸侯への待遇から賭けにでることを決意した。

「お前も知っているだろう？ 新しい皇帝が即位してからというものの、パーパルディア皇国は日に日に横暴になっている。このままいけ

ば何を要求されるか分かったものではない」

「それはそうですが……」

尚も言いつのろうとする臣下にターラ14世は手を振って遮る。

「どうあれ、賽は投げられたのだ。我々の世代が後の世で日本の属国になる選択をした売国奴と蔑まれるか、アルタラス王国中興の祖と称えられるかは、我々の今後の働きにかかっている。時間はあまりないが、やれることをやるぞ」

決意のこもった瞳とともに断言するターラ14世。

彼の決断により、パーパルディア皇国全土は日本の爆撃圏内に収まった。

国防装備研究庁の管轄するビルの一室、そこにはロデニウス大陸の友好国から集められた魔導士たちがいた。

「皆様にわざわざ我が国にまでお越しいただいた理由は、皆様の持つ魔法の知識……そして魔法を使えるがゆえの視点を求めたためです」

挨拶もそこそこに司会を務める男は説明を始める。

「ご存知の方も多いと思いますが、我々日本人は魔力を持ちません。ですので魔法も使えない。しかし、魔法技術を理解し分析するには、やはり専門家がいてくれたほうが心強い。そのために皆様が集められました……。ここまではよろしいですか？」

戸惑いながらも理解を示した彼らに、司会役の男は話を続ける。

「分析の対象は古の魔法帝国を含めた、魔法国家です。彼らの魔法の道具はどのような原理で、どのように動くのか？ また我々が実現、あるいは構想していることを彼らは実現可能か？ それを知るのが我々の目的です。手始めに、こちらの映像をご覧ください」

室内が暗くなり、プロジェクターが司会の手の上に映像を映し出す。

映像では、金属製の分厚い板に画面の外から飛んできた物体がぶつかった瞬間、激しい炎と光とともに穴が開く様子が映っていた。

「特殊な形状の容器を用いて火薬の力を一点に集中させ、分厚い装甲に穴をあける……わが国ではH E A Tと呼ばれるものなのですが、魔法を用いて同じことは可能でしょうか？」

ざわざわと喧騒が魔導士たちの間に広がる。

ややあつて、旧ロウリア貴族領から来た老人が手を挙げて答えた。

「可能かと思われませぬ。同じ形状の器を用いて、火薬の代わりとなる魔法……火、風、それから雷属性の魔力で組んだもので再現できるでしょう。無論、試行錯誤は必須でしょうが」

「ありがとうございます。……やはり魔法で科学の再現は可能ですか。では次にこちらの古の魔法帝国が運用していた兵器について……」

日本と友好国の頭脳の共同作業は続く。

第2文明圏の列強国ムー。

神聖ミリシアル帝国に次ぐ世界2位の大国であり、独力で機械文明を発展させてきた歴史を持つ。

ムー国内にある空軍基地と民間空港が併設されたアインク空港に技術士官マイラスが呼び出された。

「技術士官のマイラスです」

「ご苦労、マイラス君。さっそくだが今日、君を呼んだ理由について話そう。つい先日、我が国に国交開設を求めて訪れた艦隊。特に旗艦を調べてもらいたいのだ」

「？ 艦隊の旗艦を、ですか？」

「うむ、日本国というらしいのだが、なんでも文明圏外国家らしいが、そうとは思えないのだよ」

出会いがしらにいきなり本題に入る上司に困惑しつつも、まじめな態度を崩さないマイラスに上司から数枚の写真が手渡される。

「っ、これはっ!!？」

マイラスは見せられた写真を食い入るように見つめ、ワナワナ震える。

写真には、ラ・カサミが巡洋艦に見えるほどの巨大戦艦が写っていた。

「この戦艦は日本国のものらしい。彼らはそう言っただけだが、正直信じがたいというのが本音だ。魔力の反応も一切なかったからね」「つまりこれは内燃機関で動く機械文明のものだということだが……、もしそうなら日本国は我がムーを超える技術力を持っていることになる。そこでマイラス君。君には彼らの軍艦が、我が国より本当に優れているのか調べてほしいのだ」

「幸いと言うべきか、彼らは飛行機械も有しているようですね。……、アイナंक空港に来ている。我が国を案内して我が国の技術を見せつつ探りを入れてくれたまえ」

「分かりました。このマイラス、全身全霊で任務にあたります」
外交官と上司に説明されたマイラスはピシリと敬礼して任務を受諾する。

（ラ・カサミを超える戦艦に独自開発の飛行機械を保有する国家だと……！　信じ難いが、もし本当ならば是非とも間近で見たいものだ！）

内心では使命感と好奇心が溶け合いつつ、やる気となって燃え盛っていたが。

空港に着陸した日本のヘリコプターに驚愕したり、ムーの歴史を教えた際に実は大昔の友好国だったことが判明したりした激動の数日乗り越え、ついにマイラスは日本の戦艦を直接見る時が来た。
港から見える位置に、日本国の戦艦は停泊していた。

「あれが我が国の保有する4隻の戦艦が内の1隻、ながとです」

「あれが……」

写真で見るとは違う、船から発せられる見えない圧力を感じる。

大きくもしなやかさを感じさせる船体に、城砦を思わせる重厚な艦橋と連装砲4基8門を載せた黒鉄の要塞。

「主砲は42cm連装砲4基8門。また各種装備も我が国の優秀な

ものを搭載しており、世界最強の戦艦と自負しております」

「よ、よんじゅう………。ははは……、それだけの大口徑なら威力も凄まじいのでしょね」

「はい。それ相応の防御を取り入れた軍艦でなければ、一撃轟沈もありえます」

自国の戦艦がまさにそうなりそうだと、冷や汗をかきながら顔を引きつらせるマイラス。

ちなみに彼らの周囲では、見たこともない巨大戦艦を一目見ようと人だかりができていた。

「少し静かな場所へ行きませんか？　ここでは落ち着いた話は無理でしょうから……」

「……そうですね」

気遣うべき客人に気を遣われる。

専門の外交官ではないとはいえ、これはマイラスの失点に違いなかった。

恥じ入りながら近くの喫茶店へ案内し、用意させたコーヒーをすすりつつ精神を落ち着かせ、思考をまとめる。

（日本は間違いなく我が国を超える技術力を持った国だ！　ながとだけではない。それらを作り、運用できる国力……国の基礎からしてムーよりも巨大かつ強固なんだ！）

日本の使節相手にムーの力を見せるたびにカウンターを食らってきたマイラスは、日本がムーよりも国力で優ることを認めていた。

だがそれはマイラスが、ムーが両手を上げて降参することを意味するものではない。

（確かに戦争や貿易で勝ち目はないかもしれない。だが我が国は世界第2位の列強として培ってきた各国との伝手がある。それにもし、西で暴れているグラ・バルカス帝国と日本が対立したら我が国は地理的に重要な拠点となりうる。そこを売り込めばあるいは……）

自分の手札をどう使えば日本相手に有利に立ち回れるか、マイラスは脳を高速回転させて考える。

（いずれにせよ、上が勘違いしないよう注意しつつ、外交部とも連携

をとって少しでも有利な立場を確保していくしかない)

「……先ほどは失礼しました。みつともないところをお見せしてしまい……」

コーヒーで湿らせたマイラスはまず謝罪を口にする。

事実であり、また彼らの性格からして下手に出ることで好印象を与えられると踏んだからだ。

「マイラスさん、気にしないでください。自身の常識から外れたものを、こう何度も目の当たりにしていたら、誰でもそうなるでしょうから」

「お優しい言葉、感謝します」

遠回しに自分たちの力を誇示しつつ、相手を許すことで器の大きさを見せつける。

出会った頃ならともかく、腹の決まったマイラスは動じることなく笑顔で礼を言う。

「日本の力は、この数日でよく理解できました……。願わくば良い関係を築きたいものです」

「我々も同じ気持ちです。しかし、信頼関係には相互の誠意が不可欠。これは一朝一夕で築くことは叶いません」

(すぐには技術供与しない。してほしければそれ相応の対価をよこせ、といったところか……)

内心で納得するマイラス。

どこだってよほどのことがなければ、自国の先端技術を他国へ売るはずがない。

「……長い付き合いになりそうですね」

乾いた笑みを浮かべるマイラスに外交官はニコリと笑いかける。

「そうですね。願わくば、それが両国にとって望ましい形であることを願うばかりです」

後世に知日派の代表格として歴史に名を刻むマイラス。

そのきっかけとなった日本国使節の案内は、彼にとって祖国の前途多難を予想させるものであった。

パーパルディア皇国属領クーズ領。

パーパルディア皇国の過酷な統治下にある属領の1つであるこの地の住人は、みなパーパルディア皇国の暴虐と搾取に苦しみ、暗い表情を浮かべている。

日が暮れつつある時間、人もまばらな道を妙に存在感のない男が歩いていた。

「……………」

男は町を出て森の中にある小屋に入ると、糞尿の入った壺をどかし、床板を外してさらに土を掘る。しばらく掘ると、汚れた木箱が土の中より出てきた。

箱の中から男は金属の箱状の製品——通信機器を取り出し、操作を始める。

「クーズの『労働者組合』は順調に拡大中。ストライキにはあと2カ月を要する……………」

機械を前にぶつぶつとつぶやきながら操作を続ける。

全ての操作を終えたのか、男は通信機を箱に戻して穴の底に音を立たないようそつと置いた。

「…………自由と権利のために精々、働いてくれたまえよ？ 労働者諸君」

陰湿な笑みを浮かべながら、労働者だった男は通信機の入った箱を土の中に埋めた。

階段を踏みしめて・4段

クワ・トイネ公国近海にて、1隻の船が白波を立てながら疾駆していた。

艦尾にクワ・トイネ国旗を掲げているその船の名はリーン・ノウ。クワ・トイネ公国海軍に日本から供与された小型駆逐艦である。

「機関室！ もっと出力は上がらんのか!? 目標の倍かかっているぞ！」

『申し訳ありません！ 機関の調節が上手くいかず……』

「言い訳はいい！ とにかく最大戦速までもっていけ！」

無線機に向かって怒鳴るのはリーン・ノウ艦長ミドリ。

荒々しく無線機を置くと振り返り、そこに佇む人物に頭を下げた。

「申し訳ありません、またしても機関科の連中のミスです。最大戦速に達するには、もうしばらくかかるかと……」

「最初のころに比べればだいぶ上達しましたが、やはり内燃機関が手こずりますか」

ミドリがペコペコ頭を下げている相手はクワ・トイネ公国の人間ではない。

日本から派遣された教官であり、かつてリーン・ノウの同型艦に乗り旧海上自衛隊に挑んだ海軍将校である。

祖国の敗戦後、食うために国防海軍に入隊したのはいいが、デジタル化が進む近代艦に馴染めずいたところ、クワ・トイネ公国への教官の話に飛びついたという経歴を持つ男でもある。

「機関科の連中はあとで大目玉でしょうな……自業自得ですが」

「これまで機械に触れたこともない人間としては、かなり飲み込みが早い部類なんですがね」

「教官ならばお判りでしょう？ 実戦では、そのような言い訳は通しません。機関科の指導員の方にお願ひしてさらなる特訓を実施させます」

強い意思を示すミドリに諦めたように肩をすくめる教官。

そんな彼にミドリは軽く頭を下げると、駆逐艦リーン・ノウの指揮

に復帰した。

日本によって新たに開発されたキツジ軍港。

リーン・ノウの母港でもあるこの港は、開発と維持にかかる費用を幾分か負担する代わりに日本も使用権を得ており、司令部も設置されている。

「リーン・ノウは今日も訓練か。精が出るな」

「艦長は我が国と接触した最初の人間でしたね。その経験がいい方向へ働いてくれればよいのですが」

司令室で世間話に興じている壮年の将校と黒縁メガネの背広男。

当然、どちらもただの国家公務員ではない。将校は小規模とはいえ、駐クワ・トイネ艦隊を預かるキツジ司令官であり、背広は諜報機関から派遣された説明係りだ。

「それで？ やはり神聖ミリシアル帝国の航空機は……」

「はい。予想以上の低性能で間違いないかと」

日本はムーとの航路防衛のついでに、神聖ミリシアル帝国の国力を探るべく各種機材を搭載した情報収集艦を多数同行させていた。

結果は上々で、異世界最強と呼ばれる国家の姿が少しずつ見えてきた。

「確認された最高速度は500km程度。加速力も極めて悪く、専門家も交えた会議では、Me262などの黎明期ジェット機並みとの結論が出ました」

「こちらの監視に気が付き、意図的に性能を落としていたのではないのか？ いくらなんでもジェット戦闘機でこの性能はないだろう」

「それについては、ジーミ王国を通じてミリシアルのジェット……天の浮舟のエンジンを入手しています。型落ちですが、本土で調べれば神聖ミリシアル帝国の技術レベルも含めて色々と分かるでしょう」

「それまではこの出歯亀を継続か」

「盗み聞きもお忘れなく」

背広はいたずらっぽく軽口を叩く。

魔法技術で遅れている日本は、魔信の解読に成功していない。魔信が発せられたことは探知できるが、その内容までは判読できないのだ。

なので、ミリシアルの発する魔信を余すことなく傍受し、将来必要となる魔法暗号技術を蓄積している。

「出歯亀だろうが盗み聞きだろうが、やってやるさ。それで次の戦争に勝てるのならな」

「……やはりこれ以上の建築は不可能か」

「残念ながら。これ以上は立地から考えて農地を潰さない……」

カナタと険しい顔で話しているのはクワ・トイネ公国の工業化を担う産業大臣。

彼らはいま、クワ・トイネ公国が直面している問題について話していた。

クワ・トイネ公国は重工業化に向いていない。

工業化を進めれば、当然工場などを建設する土地が必要となる。だが国土の大部分は農地と牧場にしてしまっている。

加えて工業化が進めば、環境汚染も発生する。クワ・トイネ農産品のブランドに傷をつけないために、対策は莫大な国家予算を組んでのプロジェクトとなり、上層部に二の足を踏ませる事となる。

皮肉なことにクワ・トイネに富をもたらしている土壌が工業化を妨げているのだ。

「威勢のいい奴は、目指せ軽空母打撃群など言っているが、旧式駆逐艦1隻まともに扱えぬ我がそこに至るまで、あと何年かかるのか……」

カナタは急激な近代化とそれに伴う国力の増大に気を大きくした一部の言動を思い出し表情を暗くする。

最低限、弾薬等消耗品は自給できたほうがいいと消耗品関連の工場と中規模ドックは建設されたが、リーン・ノウ以降主力となるであろう大型駆逐艦を満足に整備できるかは怪しい。

苦肉の策として、日本が実効支配している旧ロウリアの港に大型ドックを建設させてもらうという案が上がっているが、いくら同盟国とはいえ他国に頼り切りはどうかと反対意見も根強く先行きは不透明だ。

「山岳地帯やその地下に工場を立てるにしても、ドッグなどは海岸にししか建設できない。かといって日本はこれ以上、我が国に軍港を建設するつもりはない。困りましたね」

「いつそのこと、西進論者の言う通り旧ロウリア領へ侵攻しますか？」

「大臣、馬鹿なことは言わないでくださいね。この話が日本にもれたら貴方を『消す』かもしれないから」

西進論者とは読んで字のごとく、クワ・トイネから西……ロウリア王国へ軍事侵攻を行うべしと主張する者たちである。

戦前日本に詳しい人なら、北進論や南進論といった単語を聞いたことがあるだろう。

「そこまで日本は短絡的ではないと思いますが……。まあ日本の利権が絡んできますから、手を出さないほうが無難ですね」

根本的な問題が土地不足である以上、領土拡大でもない限り円満な解決はほぼ不可能だろう。だがそれは

打開策のない祖国が直面している問題に、カナタは深々とため息をついた。

ムーと日本が国交樹立してひと月ほど。

のちに多くのムー国人が当時を振り返って「まるで戦時中のような忙しさと衝撃の連続する日々だった」と回想する一カ月。

日ム間での各種条約の締結と大使館の設立から始まり、先端技術とそれに関連する製品の輸出を渋る日本と何としても自国の数十先を行く日本の技術を導入したいムーの熾烈な外交交渉。

日本によるムーの民度や倫理観など、信頼に値するかの調査と、日本の関心を買いたいムーによる貿易での優遇と外交面での口添え。

それらが一段落したころ、ムー大使館の喫煙所にて職員たちがタバコを吸いながら会話に興じていた。

「戦艦なんかを出しただけで、ここまで話が進むとはな」

「やはり技術レベルが低い相手には、威圧的な外観をした兵器が有効なようですね」

地球において、戦艦とは淘汰された艦種である。

金食い虫なのは空母と変わらないくせして、汎用性、攻撃力などなど多くの点で圧倒的に空母に劣っているからだ。

そんな現代では役立たずのごく潰しと言われても仕方がない戦艦を日本が実戦配備している理由は、試練における苦い経験にある。

「こっちは虎の子の空母を出したっていうのにあの土人ども、戦艦出した敵国についたからな」

「あのときは大変だったと、国防軍にいる高校の同期がこぼしてました」

「だろうなあ……。なんせ三正面作戦を強いられたからな……」

試練の途中、複数の転移国家との外交の際、日本は当時どうにか戦力化したばかりの空母あかぎを派遣し、交渉で有利に立とうとした。

だが同時期に帝国主義国家が派遣した戦艦に心奪われたその国々は日本から距離をとり、帝国主義国家との戦争の際には敵となり日本を苦しめた。最後は帝国主義国家ともども悲惨な末路を迎えたが。

勝利後、日本は驕れることなくその前後を含む本戦争を研究し、反省点を見つけ出して解決案を実行していった。

そのうちの1つこそ、技術レベルの低い相手でも理解できる「力の象徴」たりえる戦艦の保有。

「あの失敗から戦艦の保有が決まって、やまと型戦艦が配備された。最初は批判も多かったが、今では少なくなつたな」

「あれ以降の転移国家相手の砲艦外交。いまでも旧ロウリア諸侯、ムーとの関係構築に役立っていますからね」

「何事も考えようと使いよう次第ってことだろう……。つと、休憩も終わりだ。次はムーへの第2次保管兵器売却に関する会議だったな」

職員たちは煙草の火を消して捨てると、駆け足で次の仕事の場へ向かう。

彼らの仕事は日本国の火種同様、増えることはあっても減ることはない。

日本国最北端付近、アリューシエロン諸島。

かつて氷と岩で構成されていた新内地のこの島々は、旧敵国が建設した湾口施設を日本に編入されたのち、拡大して北方最大の海軍根拠地となっている。

「こ、これが我が国に売却してただける戦艦ですか!」

驚きのあまり声が裏返ったマイルラスに将校は笑顔で説明する。

「はい。こちらがムー国へ提示する、アリューシエロン級巡洋戦艦です」

港を占有する排水量28800tの鉄くずと本来続く本音は隠して話す。

解体しようにも全艦完成しているか、工事が進みすぎて手間がかかるので進水まで工事を進めて放置されていた4隻。

技術導入も兼ねて日本の艦艇を購入したいというムーの希望に渡りに船とばかりに提示したのである。

「主砲の口径は……?」

「30・5cmです。それを3連装砲塔で3基搭載しています」

(3連装3基……ってことは9門!? ラ・カサミの4倍以上じゃないか!)

衝撃の事実マイルラスが度肝を抜かれている間にも説明は続く。

「最大速度34ノット、それを達成する蒸気タービンも我が国が保有するものの中では最高峰の性能を有しております」

「おお……」

「100km先の航空機を捕捉できるレーダーとそれと連動した射撃管制装置。必要な電力を賄う発電機などなど貴国にとって価値あるものが山のように装備されています」

将校の言う通り、いま説明されたものは全て現在のムーでは製造不可能なものばかり。

アリューシエロン級巡洋戦艦は、まさに宝の山だった。

場所は変わってアリューシエロン諸島キツカ港のビル。

「待ってください！ この金額は何かの間違いでは?！」

空調の効いた会議室にマイラスの悲鳴のような叫び声が響く。

彼の手元にある書面にはラ・カサミが100隻分の建造費に匹敵する額が書かれていた。

「よく書類をご覧になってください。湾口設備の建設費用、電探等の電子装備などの技術的価値とライセンス料など……それら諸々の費用を含めた妥当な金額です」

眉一つ動かさず説明する将校とは対称的に、顔を歪めているムー交渉団。

「また、これらの費用は分割払いが認められておりますが、期限内のお支払いが難しい場合には、貴国が建設した各国の飛行場などの海外利権。ムー国内の湾口、鉄道利権の譲渡で相殺することも可能です」

（艦齢5年に満たない戦艦を売るという話だから、なにか裏があるとは思っていたが……。なるほど、日本はロウリア王国の諸侯にそうしたように、我が国の利権を得るつもりか）

（くれてやっても、そこまで惜しくない技術しか使われていない戦艦。それもムーが本気を出せば今後30年以内にいくつかは実現可能なものがほとんど。売り時の今に高く売りつけなければ……）

お互いの内心をよそに、日本製戦艦が喉から手が出るほど欲しいムーと少しでもこれまでの維持費などをペイしたい日本による熾烈な価格交渉が始まった。

結果、日本はアリューシエロン級巡洋戦艦4隻と各種工作機械に技術、ライセンスをムーへ売却することと引き換えに、ムーは日本へ多額の代金と国外の飛行場の使用並びに改築の権利、マリンを含むムー国産兵器を売却することとなった。

第3文明圏の列強、パーパルディア皇国。

神聖ミリシアル帝国、ムーからも遠いこの大国は高みを知らぬがゆえに、自らを日の沈まぬ帝国と思い、驕っていた。

その皇帝のお膝元たる皇都エストシラント、パラディス城にて開かれる御前会議にて近年、ロデニウス大陸を中心に話題となりつつある日本国が議題に上がった。

「ロウリア王国への工作は失敗。皇国の影響力確保は成らず、か」

「ですがアルタラス王国とフェン王国を落とせば、ロデニウス大陸以西の通商路を抑えられます。そこからロデニウス大陸の各勢力に圧力かけ、個別に取り込みつつ、いくつかは攻め滅ぼせばよいかと」
「うむ。それでよかろう」

皇帝ルディアスと第1外務局局長エルトが今後のロデニウス大陸への方針を話し終えたところで、ルディアスはカイオスへ顔を向ける。

「——して、カイオスよ」

「はっ」

「ロウリア王国を滅ぼした………日本だったか？ その国には何か対処しているのか？」

「はっ、いいえ。フェン王国とアルタラス王国への圧力を優先し、放置しております」

「何故だ？」

「ここで発言を間違えれば首が飛ぶ。」

そう確信したカイオスは唾を飲み込み、ゆっくりと語りだす。

「国家監察軍に余り余裕がないためです。通常ならば問題ないのですが、フェン王国とアルタラス王国侵攻の時期が重なったために先送りに」

「少数ならば動かせる船はあるであろう？ なぜそれを差し向けない？」

「蛮族どもはロウリアを攻め落とし、調子に乗っているでしょう。」

ある程度の規模の艦隊を送らねば蛮族のことです、少数と侮り吠え掛かつてくることは必定」

「よいではないか。たかが文明圏外国家の連中など、国家監察軍でも十分返り討ちにできよう」

「奴らがただの蛮族であれば、私も迷わずそうしておりました。ですが、とある情報が入ってきました……」

そこでカイオスは口をつぐむ。自身の持つ情報を彼自身信じきれないゆえに。

しかし、皇帝臨席のこの場で、黙秘などできようはずもない。ややあつて、カイオスは重々しく口を開いた。

「現在、ムーから派遣された一団が日本に滞在しているらしいのですが……」

「どうかしたのか？」

「私自身、信じがたい話なのですが……ムーの船から飛行機械が降ろされたらしいのです」

「なんだと!!」

ルディアスが腰を浮かべて叫ぶ。他の出席者も驚いた様子で会議室にざわめきが満ちる。

この話が事実だとすれば、世界第2位の列強・ムーが日本国に対し軍事支援を行っている可能性がある。

「当初は下らぬ噂と切って捨てましたが……、個人的につながるある商人たちから情報と魔写が複数送られてきたので個人的に調査を行いました。こちらがその情報をまとめたものです」

そう言つて資料をルディアスに渡す。1つしかないとために、ルディアスから順に会議室の面々が回し読みしているそこには、文明圏外国家らしからぬ近代的な港に接岸した輸送船から降ろされる複葉のプロペラ機——マリンの魔写があつた。

「残念ながら、日本国に関してはまだ調べ始めたばかりですので、これ以上の情報はありません。数点の魔写と商人からの情報のみでは信憑性に欠けるので、今まで報告を控えておりました」

「そうか。いや、ならば仕方あるまい。だが日本がムーと何らかの

関係を築いていると見るべきだが、なぜムー本国から遠く離れた文明圏外国家を支援する……？」

そのとき、ルディアスの脳に電流が走る。

情報の欠けた中で閃いた推測であるそれを、疑念に満ちたルディアスの心は確信へと押し上げ、口より吐き出させた。

「もしや……ムーは日本国を支援し、傀儡として第3文明圏を間接的に支配下に置くつもりか！」

突然の発言に驚く出席者たちだが、同時に納得のいく結論でもあった。

一部勢力の独断とはいえ、皇国が支援していたロウリア王国が負けたのならば、相応の理由があるはず。そして相手が、ムーがバツクについた日本ならば納得がいく。

「カイオスよ、よくこの情報を手に入れた。お前は間違いなく皇国の未来を救った」

「はっ！ ありがたきお言葉です！」

「うむ。それで日本への対処だが、このままムーのてこ入れが続けば厄介な存在になるかもしれない。国家監察軍が無理ならば海軍を動かせ。ヴェロニアも投入せよ」

「ヴェロニアもですか？」

ヴェロニアとはパールディア皇国最新鋭ワイバーン、オーバーロード種を搭載できる最新鋭竜母である。

オーバーロード種自体はまだ多くなく、ヴェロニア自体も通常の竜母より高コストなため1隻しかない。

「時間がたてば奴らがラ・カサミ級なども手に入れるやもしれん。そうなる前に、芽を摘むのだ」

かくしてパールディア皇国は戦争機械となり、全力稼働すべく準備に入る。

日本とクワ・トイネ公国の中間に位置する日本領ププティーナ諸島の通信所の記録より抜粋――

——緊急連絡。オオトカゲは東へ向かう。目的は狩りである。繰り返す、オオトカゲは東へ向かう。目的は狩りである。

——なお、南の川を渡るトカゲの数は変わらず。

——第8艦隊へ。訓練を終え次第、指定された海域へ向かい、「海賊」を撃滅せよ。

——これより日本国の商船は全て独航を禁止とする。国防海軍の護衛の下運行するように。

——駐アルタラス王国大使へ連絡。国王へ接近しつつある「海賊」の情報を速やかに提供すること。

——また軍事顧問団はアルタラス王国軍と共同で「海賊」を撃退。可能ならば殲滅せよ。

階段を踏みしめて・9段

日本本土にある国防装備研究庁に、ジェットエンジンに酷似した工業製品が秘密裏に運び込まれた。

「これがか？」

「はい、神聖ミリシアル帝国のジェットエンジン——彼らが魔光呪発式空気圧縮放射エンジンと呼ぶ、魔法で動く発動機です」

「研究員たちの前に鎮座するのは神聖ミリシアル帝国製ジェットエンジン。」

「管理が比較的ゆるかった旧型を、ジミー王国の協力を得て第3国経由での輸入に成功したのだ。」

「対価は鹵獲した（日本基準で）骨董品の暗号機30台。」

「軽く調べたそうだが、何か分かったか？」

「はい。まず材質が想像以上に悪いです。魔法で部品を強化して誤魔化していますが、魔法がなければネ20のようなことになっていませんね」

「戦前の日本で製作されたジェットエンジン、ネ20。」

「特殊攻撃機橘花の心臓にもなったエンジンだが、信頼性、耐久性、出力とエンジンとして大事な要素全てに問題を抱えており、平時なら実験用の域を出ない代物であった。」

「他にもサイズのわりに出力が低すぎますね。これで実戦用の軍用機を作るのはかなり無理があるかと。これ以上は、もつと時間をかけないと分かりません」

「……旧型ということを差し引いても酷いな。ジミー王国かミリシアルに粗悪品を掴まされたんじゃないのか？」

「上もその可能性も疑っているようで、念のため別ルートからも入手するようです。……これは個人的な感想ですが、たぶんこいつは正規品だと思います。粗悪品にしては、製造も管理も、きちんとされていたことが伺えますから」

「優秀で周囲からの信頼も厚い職員の言葉に、上司はうなりながら考える。」

「そういえば……神聖ミリシアル帝国はラヴァーナル帝国の遺跡から発掘したものを解析して近代的な文明を築いていると聞いたな。まさか、現物のデッドコピーばかり繰り返して、理論や基礎研究が進んでいないのか？」

「さすがにそれはないかと……。飛行機を大々的に運用しているのですから、ある程度の理論はあるはずですよ」

常識的に考えれば、工業製品を量産し、運用するのであれば、それらに関する技術と学問がある程度は蓄積されていなければならぬ。

機械とは精巧になればなるほど、基礎の遅れが形となって出てくるのだから。

「うーむ、ミリシアルに関してはもっと探りを入れてもらわねばならんか。報告書に意見を添えておこう」

国防装備研究庁の職員たちは、異世界最強国家の国力を探るべく動き始める。

パーパルディア王国からの暴発を狙った無礼千万な要求に宣戦布告で答えたアルタラス王国では、日本からのタレコミもあってすでに迎撃準備に入っていた。

「敵艦隊の位置は間違いないか!？」

「問題ありません！ 念のために日本にも確認を取りましたが、向こうの情報とも一致しました！」

最終確認を終えたアルタラス王国空軍司令官は、興奮で目をぎらつかせる部下たちに訓示を述べる。

「これより我がアルタラス王国軍はパーパルディア皇国軍に対し、攻撃を開始する。列強が相手だが、日本から供与された兵器とそれを使いこなす諸君らがいる限り、我が国に敗北はない！ 心してかかれ！」

「ハッ！」

ムーが建設した空港とは別の、日本がアルタラス王国軍の訓練用に作り上げた簡易飛行場からプロペラ、もしくはジェット機の噴流を吹き

散らしながら離陸してゆくのは、明らかに人が搭乗できないサイズの小型飛行機。

これこそがアルタラス王国空軍、唯一にして主航空戦力たるドローン兵器たちである。

当初、アルタラス王国としては航空戦力を全て日本の戦闘機に置き換えるつもりでいたのだが、日本側から予想されるパーパルディア皇国の進攻にパイロットの育成が間に合わないと伝えられて頓挫してしまった。

そこで提案されたのが、この無人機である。

物にもよるが、有人飛行機よりも操作の習得が容易で、それほど高度な設備を要求されない。非近代・非科学国家のアルタラス王国でも比較的早期に戦力化できるドローンが、アルタラスの事情に合致していると説明された。

この提案を呑んだアルタラス王国は、パイロット候補を日本に派遣して訓練してもらいつつ、国内の空軍兵士たちに猛訓練を課し、顧問団とセットで送られてきたドローンの操作を覚えさせた。

アルタラス王国の希望と命運を背負い、多種多様なドローンが、パーパルディア皇国竜母艦隊を攻撃すべく飛び立っていった。

パーパルディア皇国監察軍の艦隊はアルタラス王国へ進路をとっていた。

目的はアルタラス王国の占領。上陸とともに兵力差に物を言わせてアルタラス王国軍を粉碎し、電撃的に王都を占領、そのまま国家崩壊へ追い込むという作戦が採択された。

「竜母6隻とそこに載せられたワイバーンロード。これをもってまず制空権を確保し、その後の上陸を開始する。各員、油断なく事に当たれと伝えよ。アルタラス如きに被害を出したら、末代までの恥だぞ」

『はっ！』

魔信で艦隊の面々に、再度の作戦手順の確認と訓示を終えたポクト

アール提督は船窓へ顔を向ける。

丸い船窓からは、雄々しく波をかきわけ進む竜母が見える。

「戦列艦もいいが、竜母もまた逞しくも美しい、いい船だな」

甲板にワイバーンを上げ始めた竜母に突入していく影が一瞬、ポクトアールの目が捉えた。

「……んっ!!?」

窓の向こうで竜母が爆発し、沈んでいく。

さらに飛来してきた黒い影は竜母に激突するたびに竜母が爆発して沈むから大きく傾く。

「なんだ!? 敵の攻撃か!!? 通信兵、今すぐ上空で警戒中のワイバーンロードに命令しろ! 敵の攻撃を受けている。周囲を調べ、敵を見つけ次第攻撃せよ、だ!」

「了解しまし……」

通信兵が返事を終える前に、ポクトアールの意識は闇に落ちた。

全ての竜母を潰し終えて、あぶれてしまった自爆ドローンの操縦者がたまたま目につけた戦列艦が、ポクトアールのいる旗艦だった。

この些細な不運から、パーパルディア艦隊は混乱の収束にかなりの時間をかけることとなる。

低視認迷彩を施し、低空を飛行してきたドローンに母艦をやられたワイバーンロードたちは、遮二無二アルタラス王国へ飛んでいく。

竜母を全て撃破された以上、彼らが下りられる場所はアルタラスしかないのだ。海上に着水することもできるが、そうすれば愛騎を失うことになる。人は引き上げられても、ワイバーンは重過ぎる。

相棒とともに生き残るには、アルタラスの一部を占領し、友軍が来るまで粘るしかない。

「……! 陸地が見えたぞ! 地上の蛮族どもを焼き払え!」

『おおおーっ!!!』

もともとアルタラス王国の近くまで来ていたこともあって、すぐに陸地が見えてくる。

自分たちが生き残るためにも、一刻も早く上陸地点のアルタラス兵を殲滅し、味方がすぐ上陸できる状況にしなければならない。

焦りが隊長の思考を焦がすなかで、陸地から光が煙とともに現れる。

「……？　なんだあれ」

は、と続けようとした隊長は煙の尾を引きつつ突入してきた灰色の槍の爆発で消滅した。

『た、隊長ーっ!!』

自分たちの上司が一瞬で死んだことを理解した誰かの叫びが魔信を通して部隊の全員に伝わる。

そこへ僅かな時間差で発射された灰色の槍が再び爆発する。それも複数。

血と肉の雨がアルタラスの海と大地に降り注ぐなか、幸運にも狙われなかったワイバーンロードたちは速度を上げて鉄臭い雨を浴びながら突き進む。

このまま空にいたら死ぬ、さりとて地上に降りてもアルタラス兵に殺される。ならば殺される前に1人でも多くの敵兵を道連れにくれる。

自棄と狂気が混じった思考で突進しながら、また1騎、1騎と落とされていく。

最後に残った1騎が陸地の上に達した。竜騎士は歪んだ笑みで相棒に導力火炎弾を噴くよう命じ——四方八方が撃ち込まれた大小様々な光弾によってミンチよりも損壊の激しい死体となった。

「空軍連中はよくやってくれた。これで我々は頭上を気にすることなく戦える」

「司令官、そろそろ……」

「うむ。……」

指揮官を失い、航空戦力も失ったパーパルディア艦隊は、それでも上陸を決行した。

やられたまま引いては国に帰った際にどのような処罰が下るか分らないのに加え、あれ以降竜母を屠った攻撃が行われなかったことから、もう実行できないか、何かしらの制限があるのだろうかと推測——現実逃避ともいう——し、陸戦に持ち込めれば勝機はあると判断したのだ。

パーパルディアの技術レベルに似合わぬ近代的なデザインの揚陸船が、アルタラスの砂浜目がけて突き進む。

リントブルムと兵員を載せた木造のそれにロケット、榴弾、迫撃砲弾が弾雨と表現するのに不足ないほど撃ち込まれる。

一方的に攻撃される揚陸船を支援しようとして砂浜へ近づく戦列艦。そちらにも火力の一部を向けられたことで、これまで文明圏外国家相手に無敵を誇った戦列艦が、誘爆によりはじけ飛ぶ。

しかしその隙について数隻の揚陸船が接岸に成功した。

「急げ、急げ！ 船にいたら狙われるぞ！」

「リントブルムを前に出せ！ 盾にして前進するんだ！」

数十倍もの人間と装備を犠牲に上陸を果たした皇国兵たち。

どうか一矢報いようと足掻くが、事前に上陸地点を予測して張り巡らされた鉄条網に阻まれ、前進できずにいる。

「上陸を許したか……、上陸地点に主力部隊を向かわせろ！ 一兵たりとて生かして返すな！」

日本国防陸軍式教育を受けた精鋭部隊。装備も人員もアルタラス最高の部隊が上陸部隊の前に立ちはだかった。

アルタラス王国陸軍の主力を務めるのは戦車……ではなく自走高射機関砲と155mm自走砲である。

日本との交流以前から列強の研究をしていたアルタラス王国は、当然のように日本の研究も行い、その研究結果をもとにこれらの装備が最適であると結論付けた。

・パーパルディアのリントブルムを遠距離から撃破できるのは戦車砲も高射機関砲も変わらない。だが機関砲は歩兵を薙ぎ払うのにも使える。

・戦車との最大の違いとして、ワイバーン対策も一緒に出来る。高

射機関砲1本に絞れば、数をそろえて地上と空の防御を厚くできる。

・高射機関砲が届かない距離に逃げる戦列艦は155mm自走砲と対戦車ミサイル、空軍の支援で対処すればよい。

・まとめ買いで単価を下げ、浮いた予算で予備の砲弾と部品を買える。

つまり相手に脅威となる火砲を備えた装甲戦力が存在しないため、航空戦力にも同時に対処できる自走高射機関砲を求めたということだ。

「目標！ 敵歩兵ならびにリントブルム。敵船は砲兵に任せろ！」

「了解！ 1号から4号、一斉射撃開始！ 撃てーっ!!!」

40mm、35mm、30mm、20mm……日本中からかき集めた高射機関砲から、人間には過剰な威力を持つ4種の砲弾が放たれる。

原始的な矢を弾くりントブルムも、金属製の怪物を倒すために生み出された鉄礫には耐えられず、周囲のパーパルディア兵たちと共に砂浜を赤く染めながら軀を晒していく。

「提督！ 上陸部隊はアルタラス王国軍の迎撃にあい、全滅しました！ 援護に向かった戦列艦も……」

「……」ここまでだ。艦隊は反転し、本国へ帰還する」

最後の賭けであった上陸作戦も失敗に終わったことで、代理で指揮を執っていた提督は撤退を決断する。

「敵残存艦艇、撤退していきます」

「日本軍に連絡して、温存しておいた大型無人機を発進させろ！」

ワイバーンがいなければ落とされる心配はない！」

目の前で尻尾巻いて逃げようとする侵略者を見逃すほど、アルタラス王国軍はお人よしではない。

内燃機関搭載の船に比べれば悲しいほど遅い帆船たちは、それでも風神の涙を全力稼働させつつ、群れの一部を犠牲にしながらアルタラス島から少しずつ遠ざかっていく。

「榴弾砲、対戦車ミサイルは射程に入っている限り攻撃を続けろ！ 空軍と日本軍には射程外へ逃げた奴を狙うよう強く言っておけ。」

ここで逃したら陛下と国民に顔向けできんぞ！」

爆弾、ロケットあるいは機関砲を載せた大型無人機と自爆用小型無人機が、散り散りとなって逃げようとする戦列艦を1隻ずつ仕留めていく。ワイバーンの援護もなく、まともな対空兵器を持っていない彼らにできる抵抗は逃げることだけである。

技術、戦意ともにパーパルディア軍に勝っていたアルタラス王国軍は、パーパルディア皇国の侵略の手を跳ね除けることに成功した。

リントブルムの死骸等の戦利品は日本と共同で調査されることとなり、捕虜は一部の例外を除き、アルタラスの法に則り鉾山労働へと駆り出されることとなる。

日本最西端の島より、100km西の海。パーパルディア皇国海軍は既にここまで進出していた。

アルタラスの海で起きた同胞の悲劇など知る由もない彼らは、ムーによるこれ以上の日本支援を防ぐため、ムーの物資を降ろしているらしい島への攻撃を準備していた。

作戦の重要性から、12隻もの竜母が投入されている。その威容は文明圏外国家の中小国家が震えあがり、降伏を視野に入れるほどだ。

「これほどの戦力を任されるとは……。感慨深い、蛮族ごときが相手では少々物足りないな」

艦隊を指揮するバーンは、これほどの戦力を任されたことへの喜びと、その力をふるう先が相応しい相手でないことに落胆を感じていた。

「提督、そろそろワイバーンロードの攻撃圏内です」

「よし、ヴェロニアを除く全竜母、発艦はじめ！ 不遜なる蛮族どもを殺してこい！」

旗艦ヴェロニアから発せられた命令に従い、11隻の竜母からワイバーンロードが甲板を蹴って空へ舞う。

100騎のワイバーンロードは、艦隊からみて東にある日本の島、クツハパヤ・ソウへ攻撃すべく飛行する。

蛮族に一撃を加えんと士気あげている竜騎士たちが向かう先、クツハパヤ・ソウは無人数島だったが、開拓が進められていた途中でパールディア皇国の侵攻が起きたために、ある施設が建設された。

それは日本製戦闘機導入で、不要となったワイバーンをクワ・トイネ公国、クイラ王国から運び、国防陸軍工兵隊が1カ月半で用意した厩舎に押し込んでできた偽ワイバーン基地である。

滑走路に至っては地面にベニヤ板を敷いて、ペイントしただけというお粗末さであり、そのお粗末な滑走路の脇に並んでいるのは、ムーから引き渡されたマリンなどのムーの航空機に加え、日本が鹵獲した複葉機多数。

低コスト・低クオリティを徹底して作られた偽装基地。

そんな失つても損など無いに等しい基地を、パールディア皇国の竜騎士たちは襲撃した。

「まだ離陸していないな……ワイバーンと飛行機械を優先しろ！それを片付けたら全て焼き尽くせ！」

『ハッ！』

隊長の命令に従い、竜騎士たちは厩舎と滑走路脇の古典的航空機にブレスを浴びせ、その後は目についた物、人を焼き払っていく。

基地がクツハパヤ・ソウの面積に対して小さかったこともあり、30分ほどで基地だけでなく、埠頭とそこに停泊していた帆船も焼かれ、使い物にならなくなっていた。

「これだけやればいいだろう、全騎帰投するぞ！」

奇襲が成功したからとはいえ、圧倒的勝利を納めた竜騎士たちは意気揚々と母艦へ帰ってゆく。

迎撃が一切なかったことなど、勝利に酔っている彼らは気にもしていなかった。

パールディア皇国日本侵攻艦隊の20km離れた位置の海域。

その水面下で、潜水艦あかしおはレーダーで敵艦隊を捕捉しつつ、反撃の時を待っていた。

「やはりワイバーンはとろいな……」

「所詮は生き物ですし、近代戦に対応できない兵器ですから。ドン亀なのも当然かと」

「まあそのおかげでこつちも準備万端でお出迎えできるわけだが。副長、カメラはしっかりと動作しているか？」

「はい、つつがなく。このあかしおでもしっかりと受信していますよ」
カメラが写しているのは、火の手が上がるクツハパヤ・ソウ基地。後に必要となる正当性確保のための証拠集めとして配置されたカメラたちは、一部犠牲となりつつも立派に使命を果たしていた。

「艦長、通信です。『クツハパヤ・ソウが武装勢力により攻撃を受けた。付近の国防軍部隊はただちに反撃を開始せよ』、と」

「よし分かった。……総員、ミサイル試験の時間だ。配置につけ」
ロウリア戦争にて、木造船への有効性が証明されたサーモバリックだが、ミサイルで使用した場合はどうなるのか？

もしミサイルでも十分な効果があるのなら、色々使い道が出てくる。ちようど在庫余りの亜音速対艦ミサイルがあるから、これを改造して試してみよう。

水上艦でも航空機でもなく、潜水艦が反撃役に選ばれた理由がこれである。

「竜母にミサイル発射。弾頭はサーモバリックだ」

「了解。僚艦との目標重複を避けるよう徹底しろ。サーモバリックミサイル、発射」

「付近の海域より、発射音を確認。ひきしおのものと思われます」

「ひきしおからデータ、入りました。目標は外周の戦列艦です」

一切の憐れみも気負いもなく、海狼たちは攻撃を開始した。

ワイバーン隊から魔信で戦果報告を受け取った艦隊ではちよつとしたお祭り騒ぎとなっていた。

敵の航空戦力が飛び立つ前に基地ごと全滅させられたのだ。相手が格下の蛮族とはいえ、大戦果には違いない。

「海面から何か打ちあがっ……こ、こっちへ飛んできます！」

見張り員が大声を上げて報告をしてから、詳細不明の物体が艦隊に到達するまで3分足らず。

下っ端の水兵だけでなく、指揮官たちまで浮かれていた艦隊は、全方位から接近してきた何かから発生した火球によつて海上のオーブンへと姿を変えた。

僅かな生存者たちは、誰にも気づかれることなく日本の海に還ることとなる。

クツハパヤ・ソウで起きた喜劇は、衛星を通して日本本土の会議室にも届けられていた。

「——素晴らしい。完璧だ、国防大臣。これだけの証拠があれば、攻撃されたのが囮でも問題ないだろう。外務大臣、友好各国への根回しは？」

「完了しています。総理の決断でいつでも開始できます」

「よろしい、フェン王国の保護占領を開始してくれ。……国防大臣、その後に行われる武装勢力に対する武力行使の説明を」

「はい、まずはアルタラスとフェンに大規模な飛行場を建設し、空軍輸送飛行隊を配置します。この部隊に配備する予定の新兵器……輸送機投下型巡航ミサイルパレットを使用し、武装勢力、パーパルディア皇国首都エストシラントを含む主要都市。並びに事実上の植民地である属国の軍・政府関連施設を一斉攻撃します」

国家の中枢への攻撃。国家を預かる者にとって悪夢でしかないそれを、辺境の支部にまで徹底して行う。

これが成功すれば、パーパルディア皇国は国家の屋台骨どころか、生命活動に必要な器官をほぼ全て失うこととなる。

「新兵器が故障を起こしたらどうする？ エストシラントとデュロは近いからどうにかなるが、属国は少し遠いぞ」

「そのときは代わりとして、本土に待機させている爆撃機、水上艦艇に巡航ミサイルを撃たせますので、多少作戦開始が遅れる程度です。予定です。……話を戻しまして、巡航ミサイルで敵の指揮系統を破壊したのちに、各属領の反パーパルディア組織を蜂起させて独立宣言を行わせ、最後にエストシラントとデュロを占領します」

作戦の流れを説明しきった国防大臣は、胸を張り、腹に力を込めて宣言する。

「アルタラス、エストシラント、フェン、デュロ、そしてロデニウス大陸を押さえることができれば、本土より西に多段式の哨戒・防衛網を構築できます」

それは一度目の転移以来、多くの戦災に晒され、怯えてきた日本人の悲願だった。

特にアルタラスとエストシラント、フェンは日本の船が使う航路のすぐ近くにある。シーレーン防衛、西方から来る敵の早期発見、撃破するためには是非とも手に入れたい場所である。

「東に関してはあまり拠点に適した外地がないので、新内地と同盟国、それとロデニウス大陸東海岸に基地を建設して、可能な限り遠方での早期発見に努めます」

「南東と北東に国家がなかったか？　そこを抑えれば少しはましにならないか」

「南東の国家とはすでに接触し、外交交渉が始まっているそうです。北東の国は円のように一周した、険しい山脈の内にあるため、万が一の際に安全確保が難しいのでパーパルディア皇国を片付けてからになります」

東に関しての警戒網の現状と将来について語ったところで、国防大臣はふと思いついたことを話題に挙げた。

「それと総理、今回犠牲となった者たちについては、本土にて慰霊式典を開こうと思うのですが」

「ああ、それで構わんよ。何せ人生最後に祖国の役に立ち、罪を贖った人間に、鞭打つつもりはないからな」

実に穏やかな、嘲りと蔑みのこもった瞳の笑みで優しく答える総

理。
ら。死者を意味もなく辱める趣味など、持ち合わせてはいないのだから。

階段を踏みしめて・13段

「どういうことだ!?!」

第3外務局の執務室にて、カイオスの怒号が窓ガラスを揺らす。

上司の怒りを浴びせられ、身を竦める職員を無視してカイオスは声を張り上げる。

「今回の作戦には監察軍だけでなく、海軍も加わっていたのだぞ!?!
ワイバーンは全てロードとオーバード種で固められ、戦列艦も150門級以上で編成されている。制空権、制海権を確保して速やかに上陸できるはずだ。それほどの戦力が、全滅!?! こちらに一報をよこす余裕もなく!?!? ありえんだろう!?!」

「ですが、フェンへ侵攻した艦隊以外は誰一人として連絡が取れません。アルタラスへ近づこうとすると、必ず消息不明となることも考えると、やはり全滅したと考えたほうが……」

「……百歩譲って日本懲罰艦隊が全滅したのはわからんでもない。実はムー正規軍が日本に駐留していて、返り討ちにあつたのだろう。だがアルタラスへ派遣した艦隊まで全滅するなどありえん! 連中は蛮族どものなかでは優秀だったが、列強の軍を壊滅させられる力など無かつたぞ!」

叫ぶだけ叫んで、頭を抱え込んでしまう。彼の頭はこの理解不能な状況を前に混乱しきっていた。

そこへ、バタンツと大きく音を立てて開かれるドア。ノックもせずに入ってきた職員は息を切らしながら報告する。

「た、大変です! 日本軍がフェンへ上陸しました! 占領軍はすでに壊滅状態です!」

野戦軍と艦隊をサーモバリック爆弾で焼却し、基地と統治機構は誘導爆弾で処理した日本国防陸軍海兵隊は、フェン王国南部の海岸線に油断なく上陸した。

たとえ先頭は無人化され、装甲と遠隔操作機銃をポン付けされた重

機が進み、上空から海軍の軽空母から発艦した戦闘ヘリと全身翼の無人戦闘機の的確かつ迅速な援護があるとしても、接近戦では万が一がありうるからだ。

「もうアマノキまで落したか。あと1日くらいはかかると思っていたんだがな」

「無人機と戦闘ヘリがよく働いてくれるようで、おかげさまで死傷者と重傷者ゼロです」

「閣下、現地から報告です。パールディアの生き残りが現地人によるリンチにあっているようです。1件、2件だけでも止めるかどうか、判断を仰ぎたいと」

「2件ほど止めて、助けてやればあとはもういい。アリバイさえできればいいからな、それに……現地人のストレス発散も必要だろう」強襲揚陸艦秋津洲の司令部にて、現場から入る情報をさばきながら、現場で決められない問題への対応を下していく。

「で、現地の抵抗組織か生き残った有力者は確認できたか？」

「……いるにはいましたが、反パ組織は全員で30人程度の烏合の衆。有力者のほうはパールディアに占領されたさいにほぼ全員処刑されたようです」

「そうか。まあいなくてもどうにかなる。それに飛行場と港さえ手に入れば、この島に用はない」

悲惨なフェン王国の内情をバツサリ切り捨てた司令官は、残存敵勢力の掃討と工兵隊上陸を急がせる。

3カ月後、離散したパールディア皇国軍を殲滅し終えたフェン自治区に、港と大型飛行場が完成した。

パラデイス城、大会議室では低気圧が吹き荒れていた。

その中心はもちろん日本・アルタラス侵攻艦隊全滅と日本による旧フェン王国解放の報告を受けた皇帝ルディアスである。

「して……カイオス、アルデよ」

「はっ……」

「蛮族どもへの懲罰失敗と、フエンが蛮族の手に落ちたことについて、何か申し開きはあるか？　まずはカイオス、申してみよ」

冷厳なる皇帝の詰問に、カイオスとアルデは震えながら自身が把握している情報を開陳していく。

「国家監察軍が担当したアルタラスとフエン、それぞれ順を追って説明させていただきます。まずアルタラスですが、アルタラスを攻撃するワイバーンロードの発艦中に何らかの攻撃を受け、竜母群は全滅。残った戦列艦と輸送船で上陸を強行しましたが、アルタラスから飛行機械と連射式銃による反撃によつて、これも全滅したと……」

「……いずれもムーの兵器ではないか。ムーの支援を受けている日本ならばともかく、なぜアルタラスが保有している？」

「分かりません……。なぜアルタラス如きにこれほどの軍備を用意できたのか……。日本を通じて、ムーが極秘にアルタラスを支援した可能性もありますが、それならばその兆候を我が国が掴めぬとは思えません。日本と違い、アルタラスは我が国の目と鼻の先です」

艦隊との通信が途絶する前に得た曖昧な情報しかないために、カイオスも「負けたということ以外は、何もわからない」と言っているに等しい報告しかできない。

「フエンについてですが、こちらにもアルタラス同様、たいした情報は入っておりません。ただ基地、艦隊、野戦軍全てが攻撃を受け、壊滅したことは確かです。報告を行っていた部隊も連絡が途切れていままので、おそらく……」

「いくらムーの支援を受けているとはいえ、皇軍が蛮族にこうも一方的にやられるか？　……ムー正規軍が加わっているのではないか？」

「まさか……いや、しかし、そうとしか考えられませんな。早速、第1外務局と協力し、尻尾を掴んで見せます」

栄えある皇軍が蛮族に負けた、と考えるより、大国の軍隊が覆面参戦していたから負けた、と考えたほうが納得できる。

パーパルディア皇国首脳部は納得できる答えに満足し、後日ムーを問い詰めるための証拠集めを開始することを決めた。

「日本での戦いについては、海軍が担当いたしましたので私が説明させていただきます。日本侵攻艦隊はムーとの関係が疑われる島をワイバーンロードで攻撃し、基地、港、停泊していた船舶全て焼き払うことに成功しました。ですが……そのあと艦隊からの報告が一切なく、こちらからの呼びかけにも一切反応がないことから、全滅したと判断いたしました」

「まだ無事な船はあるだろう。それらを確認に向かわせればよいではないか」

「それが……何隻か向かわせたのですが、1隻も帰ってくることもなく……」

「……いかにムーとはいえ、1隻も逃がさず、連絡もさせずに全滅させるなどできるのか……？」

日本、アルタラス、フェンと敗北が続いているのに、全ての戦いで詳しい情報が全く手に入らない。理解の及ばぬ異常事態を前に、大会議室は泥のような重い空気に包まれる。

そのタイミングで最悪の空気となった大会議室の扉が開かれ、駆け寄ってきた軍部の士官はアルデに何か耳打ちをする。

何を伝えられたのか、アルデは徐々に顔を青ざめさせてゆき、ついには死人のような表情となった。

「アルデよ、何があった？ 包み隠さず申せ」

「……洋上で警戒に当たっていた戦列艦から、大型の飛行機械が多数、皇国本土へ向けて飛行しているのを目撃したと……！」

「なっ……！」
自国へ向けて、明らかに友好的ではない航空戦力が飛来しようとしている。

この状況では、日本軍否ムー正規軍以外にあり得ない。

「急いでワイバーンオーバーロードを出撃させろ！ 1機たりとて……」

ルディアスの叫びは途中で途絶えた。

外から飛び込んできた何かが爆発し、大会議室にいた人間全てこの世から消滅させたからだ。

アルタラスに設置された無人機管制室のモニターの中に映し出されているのはパラデイス城。かつては優美であっただろう城の上部が無残に崩れている。

「呆気ないな」

エストシラント上空を飛行中の無人機操縦者が、淡々とつぶやく。彼の担当であるパラデイス城含めたエストシラントを映しているものとは別のモニターには、時間と共に赤いバツ印が増えてゆくエストランド大陸の地図が映っている。

仮にも列強と呼ばれている国が減びてゆく過程としては、あまりにも早く、そして味気なかった。

フエンとアルタラスの飛行場から離陸したC―3大型輸送機、その数30。

輸送機投下型巡航ミサイルパレットにより1機につき9発の巡航ミサイルを搭載できている。すなわちミサイルの総数は270発。

確殺の意志が込められたそれらが、パーパルディア皇国全土の高価値目標――政府組織、軍事施設、経済関連施設へと降り注いだのだ。

その結果は今、モニターに映るバツ印とその数が示している。

「おっ、なんか兵士っぽい連中が集まってるな……。攻撃要請を出しておくか」

要請を受けた無人機から投下された小型爆弾が、マスケットで武装した集団の中心で爆発する。それを阻止すべきワイバーンオーバードは空軍のF―15GJ戦闘機によって地面の染みに転職している。

パーパルディア皇国のものとは一線を画す炸薬により、ゴミのように吹き飛ばすパーパルディア人。これと似たような光景は、デユロでも起きている。

パーパルディア皇国領クーズ。その支配の象徴である総督府は、見

るも無残な瓦礫の山となっていた。

「本当にパーパルディアを……」

クーズ独立委員会の一員であるハキは、驚きを隠さずにつぶやく。

「これで信じてくれただろうか？ パーパルディア如き我が国の、日本の敵ではないと」

ハキの隣で胸を張ってそう告げるのは、存在感の薄い男——日本の
職員である。

クーズに潜入した彼は本国の指示に従い、これまで手塩をかけて育ててきた反パ組織に独立運動の開始を促した。

当然というべきか、ハキを始めとするクーズ独立委員会の面々は
渋った。いくら多くの支援をしてくれた相手の頼みとはいえ、列強相
手に喧嘩を売れといわれてはい、と言えるわけもない。

そのため職員は、ハキたちを連れて見晴らしの良い場所で、この
光景を見せつけた。

力の誇示。日本という国は、お前たちを蹂躪したパーパルディア皇
国よりも強いのだという証明である。

「疑ってすまなかった、友よ。これほどの力を持ったお前たちが味
方してくれるなら、クーズを取り戻せる」

「涙を流すのはあとだ、ハキ。まずは残ったパーパルディアのクズ
どもを片付けよう」

「そうだな……通信機で決起を伝えるんだ！ クーズを取り戻すぞ
！」

涙をぬぐって部下に命令するハキ。職員も用意していた無人機
を飛ばし、いつでも援護できるよう準備に入る。

よくてマスケット銃しか持たないパーパルディア皇国属領統治軍
に、ボルトアクションライフルで武装し、ドローンの援護を受けた民
兵たちが襲い掛かった。

僅かに残ったパーパルディア人の生き残りを始末した後、クーズ独
立委員会はクーズ共和国と名を改め、独立を宣言。

他の独立した元属領を含めて日本はこれら元パーパルディア領の独立を支持、早期の国交の樹立と復興支援を約束した。

日本式大陸掃除

パラデイス城が崩壊する様子は、多くの人が目撃していた。

自分たちの頭上をワイバーンを遥かに凌ぐ速度で飛んでゆく飛行物体は、より多くの人が目にしていった。

衛兵から話を聞こうとした者もいたが、前触れもなく起きる爆発で次々死んで数が減っているうえに、巻き込まれるのを恐れて近づけなくなった。

不安と恐怖に苛まれ、暴発寸前に達したころ、それらは来た。

海上に出現した鉄の船団と空を覆いつくす飛行機械の群れが、エストシラントへ常識を覆す速さで向かってきたのだ。

レミールは自室でシートにくるまり、震えていた。

「……ルディアスさま……なぜ……」

謎の爆発事件にて皇帝ルディアスを含めた皇国上層部が全滅した日、彼女は視察で爆発地点からも自宅からも離れていた。

今では丸ごと借り上げたホテルの一室で、他人がいるときは当たり前散らし、1人のときはこうしてルディアスが死んだことを思い出して震えて過ごす日々を送っている。

「し、失礼します！・レミール様！」

「っ！・なんだ!?! いったい何の用だ!?!」

どうしても必要な場合以外は誰も近づかなくなったレミールの部屋にドアを叩く音と、慌てた様子の侍女の声が鳴り響く。

痼癩を爆発させたレミールに臆することなく、ドアの向こうの侍女は用件を伝える。

「正体不明の軍勢が、ここエストシラントに上陸していると衛兵から報告が！」

「なんだと……皇国軍は何をしている!?!」

「レミール様！・もう皇国軍は……いえ、もう軍と呼べる存在はエストシラントにはいません！・いるのは、ごく僅かな衛兵だけです

！」
パラデイス城で謎の爆発が起きて以降、生き残った政府関係者や軍の兵士と衛兵が混乱を収めようと行動した。

だが彼らも、屋外にいれば即座に、屋内にいても遅くとも1週間以内に、エストシラント上空に居座るやたら小さい飛行機械が落とす爆弾で死亡した。

撃墜しようにも、エストシラント防衛の任に就いていたワイバーンはパラデイス城とともに基地ごと爆散し、他のワイバーン基地と連絡が取れないため、他所から引き抜いてくることもできない。

その結果、率先して動く人間はいなくなり、これ以上事態が悪化しないようにすると、自分たちの安全確保以上の行動をしなくなつた。

「裏手に馬車が用意してあります。それで脱出を……」

言い終わる前に轟く爆発音。音からして、近くで爆発が起きたのが分かる。

タイミングの良すぎる爆発に固まる2人。そこへハキハキとした男性の声かけられる。

「裏手に回した馬車がやられました！ 他の馬も巻き添えにあい全滅です！」

「そ、そんな……」

「とにかく急いで脱出の準備を！ 敵は飛行機械からも兵士を降下させています！ このままでは郊外への脱出路も塞がれ……」

そこで、急かす声を遮るように響く破裂音。

マスケットとは似ているようで違う、連続した銃声に悲鳴を上げるレミール。

一瞬の静寂を経て、荒々しくドアが蹴り破られると同時に、筒状の何か投げ込まれ、煙を噴き出す。

煙を吸い込むと急速に睡魔に襲われ、レミールは意識を暗転させた。

『羊は確保した。繰り返す、羊は確保した』

「了解。すぐ増援が到着する。それまで羊を死守せよ」

レミールに麻袋を被せ、手際よく手足を縛りあげる都市迷彩の戦闘服を着た男たち。

彼らは日本国防陸軍特殊作戦群。

陸上自衛隊のころと変わらぬ名を戴く彼らは、試練を通じて規模を拡大しつつ、最精鋭の名に恥じぬ仕事をしていた。

——戦闘ヘリの援護の元、迎えに来たV-22にレミールを放り込みつつ乗り込んだ彼らは無事、強襲揚陸艦いおうとうに帰還した。

皇族であり、過激な発言と行動を重ねてきたレミールは、アルタラス王国特別收容所に入れられることとなる。

パーパルディアア皇国とは日本と同盟国たるアルタラス王国を襲った武装勢力であり、正義を証明するためにも、その首魁を裁く必要があるのだから。

アルタラス王国飛行場に建設された無人機指揮所の管制室では、パーパルディアア皇国全土の情報が集められていた。

「まだ撃ち漏らしがいたか」

偵察衛星に加え、監視用の高高度無人飛行船と大型無人偵察機、時々現地からの情報提供者から得た情報を統合、精査して運よく生き延びた高価値目標を見つけ出しては、一つ一つ丁寧に処理する。

地道で、そして効率的な作業は今日も行われる。

「ストラトス・アイから報告。新たな高価値目標を選定した。速やかに排除されたし、なお目標近くには航空戦力が確認されている」

『ストラトス・ブレインからストラトス・アイへ、了解した。ただちに待機中の部隊に始末させる』

報告とともに送られたデータから攻撃計画が立てられ、待機していたパイロットと整備員が慌ただしく動き出す。

「……そういえば、いま待機してるのはクイラ空軍の飛行隊だな」

日本が運用しているこの飛行場には、クイラ王立空軍から派遣され

た4機のCF-1Bが「パールディア皇国を自称する海賊支配領域における治安改善任務」に従事しており、彼らもローテーションに組み込まれていた。

命令を受けたCF-1B、F-15GJが2機つつパールディア皇国の残滓を吹き飛ばすべく、飛行場から飛び立つ。

胴体下に地中貫通爆弾を吊るしたF-15GJが先行し、その後方上空でCF-1Bが護衛に就く。

大抵の目標は巡航ミサイルで片を付けてしまうのだが、今回は内部諜報員からのタレコミで地下施設の存在も確認されているため、F-15GJにバンカーバスターを搭載させての出撃となった。

『スカイ・マリアからサンド・フォックス隊。目標上空に飛行物体、ワイバーンだ。速やかに排除せよ』

「サンド・フォックス1了解、ただちに排除する。2、続け」
『2、了解』

AWACSから指示を受けたサンド・フォックス1ことグエン・ドム・ポン少尉は、緊張しながらも訓練通りにレーダーで捉えたワイバーンをロックし、中距離空対空ミサイルを発射する。

『FOX1』
『2、FOX1』

主翼下のパイロンから切り離されたのちに、AAMはロケットを点火して飛翔する。

数秒後、ミサイルと敵機を示す光点が重なり、消えた。

『敵ワイバーンの撃墜を確認。サンド・フォックス1、2おめでとう。君たちはクイラ王立空軍初の戦果を上げた』

「ありがとう、他に敵はいないか？」

『レーダーに反応はない。おそらく今墜とした敵は、巡航ミサイルの攻撃時に偶々哨戒で上がっていたんだろう』

「了解、護衛に戻る」

通信を終えてF-15GJの上位へと戻る。すでに爆撃を終えた

のか、腹に抱えていたバンカーバスターはなく、地上からは土煙がもうもうと立ちのぼっていた。

「……やっぱかつこいいなあ」

その後ろ姿を見て、グエンは少年のように目を光らせながら憧憬のこもった息を漏らす。

F-15GJゴールデンイーグル。日本国防空軍において質量ともに主力戦闘機の座を得ている戦闘爆撃機。

CF-1Bの4倍のエンジン推力が生み出す爆撃機並みの武装搭載量と隔絶した飛行性能。後席の有無だけで制空から対地・対艦任務に切り替えられる多用途性。そしてCF-1Bと比べて、目玉が飛び出そうな値段。

「いつか、俺たちも乗れる日が来るかな？」

将来、訪れてほしい未来図を思い描きながらグエン達は帰還の途に就いた。

日本新内地東部から複数の気球が舞い上がっていく。

ここだけでなく、ここからなら気流に乗ると判断された日本各地から、偵察気球を飛ばしているのだ。

気球には証拠となる文字や製造番号の類は一切なく、電子機器にも念には念を入れて5重の自壊装置が付いており、品質以外に日本だと臭わせるものは一つもない。

偵察機と人工衛星があるのに気球を使うのか？ と疑問に思うかもしれないが、これには訳がある。

気球を使って、未接触国家と要警戒対象国家の防空体制を調べるためだ。

偵察機のような速度は出ないが、衛星と違って発見・迎撃が容易かつ安価で数も揃えられる。迎撃されなければ、衛星では分かりにくい地上の詳細な画像も手に入る。

そのうえ、日本が下手人とばれるリスクもほぼない。

初期案では、ムーの近くに潜水艦を派遣して神聖ミリシアル帝国に

飛ばすことも考えられたが、ミリシアルを「現段階では」過度に刺激することは避けたかった政府の意向で取りやめとなっている。

変わりに衛星による調査の結果、要警戒対象国となったアニユン
リール皇国へ飛ばす気球が増えた。

ふわりふわりと空へ浮かび、風に乗って異世界の大空へと流されていく気球たち。

飛ばした者たちの期待する情報を得るべく、タンポポの種のように蒼穹へ昇って行った。

日本の後押しを受けて旧属領で同盟を結成し、パーパルディア皇国との対決を宣言した73ヶ国連合。

だが彼らは自国領内の安定化を優先し、パーパルディア皇国領への侵攻は行わなかった。スポンサーである日本の要望を受けてのことだ。

だがその方針に苛立ちを覚えているものたちもいた。リーム王国である。

リームとしては73ヶ国連合をパーパルディア領へとけしかけ、自分たちはできるだけ血と金を流さずにパーパルディア皇国を削り、日本の関心を買おうとしていた。

だが肝心の73ヶ国連合はいくら煽り、ちらつかせ、脅しても終始塩対応であった。

当然である。陸続きとはいえ、軍事的にも経済的にも魅力のない火事場泥棒が、最初から肩を持ち続けてきてくれた超大国に敵うわけがない。

一向に動かない連合に見切りをつけたリームは方針を変えた。

自国軍によるパーパルディア皇国への進行である。

目標は南部の工業地帯、デユロであった。

現地人を蹴散らし、パールディア皇国軍の残党に手こずりながら、リーム王国パールディア侵攻軍3万は南下を続けていた。

「將軍、この調子ですとデユロにたどり着くのは2ヶ月後になります」

「予想以上に皇国軍の生き残りが手強かったな……だが、ここまで来ればあとは要塞などない。デユロまでは損害無くたどり着けるだろう」

そう、デユロまでは問題ない。だがデユロには最新鋭のワイバーンオーバーロードが陸軍と艦隊とセットで配備されている。上空援護のワイバーンも数日前から姿を見せておらず、連絡も取れない。万が一デユロ攻略の際に来なかつたら敗退もありえる。

思考に浮かび上がる不安要素に顔をしかめっていると、羽音に似た奇妙な音に気が付く。

音の間こえる方向へ顔を向けると、そこには白く不気味な虫を思わせる機械がプロペラを回しながらリーム王国軍へと向かってきていた。

「あ、あれはまさか……！ 日本のお虫か！」

その塗装と大きさからつけられた日本製無人機のおだ名を叫ぶ。

パールディア皇国属領独立で活躍した無人機が、リーム戦線に投入された瞬間だった。

「弓でも銃でも何でもいい！ とにかくお虫どもを落とせ！」

將軍が叫ぶが、ボルトアクシオンライフルでも困難なことをマスケット銃と弓でできるわけがない。

貫通力の低い球体弾が届かない高度で接近した大型無人機は、主翼に吊り下げているポッドから白い煙を散布した。

「な、なんだこりゃ、んぎつ！ あ、があ……！」

「布で口と鼻を覆え！ 吸い込んだら……ぎ、ががが……！」

「お……！ おえ……！」

煙を浴びた兵士たちは、首を絞められ呼吸を妨げられたかのようにのたうち回り、ビクビクと痙攣して動かなくなる。

兵士も、騎士も、将軍も浴びた人間は平等に死んだ。

所用で将軍から離れていた参謀が、魔信でワイバーンを寄越せと唾を吐き散らしながら怒鳴りつける。無人機が近づくにつれ、嗚咽混じりの懇願に変わっていくが、数日前に巡航ミサイルで更地になったワイバーン基地からの返事はいになかった。

無人機から散布された化学兵器により、リーム王国パーパルディア皇国侵攻軍3万は壊滅。生き残りも無人機による追撃とパーパルディア皇国住人による報復で数を減らし、帰国できたのは100人にも満たなかった。

リーム王国によるパーパルディア皇国侵攻は、陸上兵力とワイバーンを多数失う大損害を出して失敗に終わった。

ゴミ捨てからの歓待準備

属領の安定化と陸路の確保、エストシラント並びにデユロの掌握が完了した日に、全世界へ向けて映像が発信された。

『臨時ニュースを申し上げます。臨時ニュースを申し上げます。日本国防省は、本日をもって日本国並びに同盟各国による海賊鎮圧作戦の完了を宣言。これによりパーパルディア皇国を自称していた海賊勢力は一掃され、海賊の占領下にあった大陸北部の国々は独立を取り戻すこととなります』

この放送で初めて、ムーを除く多くの国々が、パーパルディア皇国を滅ぼしたのが日本だと知った。

またこのあと続く放送は世界にさらなる驚愕をもたらす。

『また日本政府は海賊本拠地に滞在する他国の政府関係者に対し、希望するのであれば近日行われる海賊支配地域解放記念パレードへの出席を許可する旨を通達したと、報じております』

貴族の屋敷を改装して急遽用意された裁判所には、多くの旧パーパルディア皇国の人間が集められていた。

皇族、貴族、官僚、役人、軍人……公職に就いていた者以外にも商人などの民間人もいる。

集められた人間の共通点は一つ、日本・アルタラス両国への襲撃、もしくは再独立を果たした旧属領におけるパーパルディア皇国の活動に関係があることだ。

後の世にエストシラント裁判の呼び名で記憶される裁判が、開廷した。

開廷から半日、すでに1人を除く全ての犯罪者を裁き終え、残された最後のA級戦犯が脇を憲兵に固められて立たされる。

「――被告人レミールはこれまで複数の虐殺行為の指示を下してい

たことが明らかになっていきます。また本人に反省の様子は今もなく、自己正当化を繰り返すばかり。よって被告人レミールを死刑とする！」

裁判長が厳しい声で下した判決を聞いたレミールは、震えたまま俯き続けて一言も発さずにいる。

ここまで転移前の日本では考えられぬスピード判決だが、これにはきちんと理由がある。

試練の途中にて、とある国家に勝利したあと戦犯を裁くべく裁判を開いたのだが、裁判に時間をかけすぎて被告人が病死してしまったのだ。それだけでなく、自分の番が来る前に自殺を図ったりする者が出るなど、問題が多発した。

被害者遺族を中心に手酷く批判された当時の政権は、戦時裁判特例法を制定。戦争犯罪人を裁く軍事裁判に限り、一審しかなく簡略化された裁判制度を作り上げた。

「最後に被告人は何か言いたいことはありますか？ 発言を許可します」

「……許可するだど？ 私を誰だと思っている!? 私は列強パーパルディア皇国の皇族にして、いずれ世界を統べるであろうルディアス様の妻となる身だ！ 下劣な蛮族どもが！ 今すぐ解放しろ！」

この期に及んで現実を見るところか、過去の妄想を前提とした発言。

流石にプロである裁判長たちは眉一つ動かさないが、公聴席にいる大部分を占める日本人とアルタラス人は顔をしかめるか紅潮させる。

「貴女の立場ですが、国家を自称していた犯罪者集団の幹部です。夫だという皇帝を僭称していた海賊のトップはすでに死亡が確認されています。それと、解放ですがこれはあり得ません。日本国の法であろうと、第3文明圏の法であろうと、貴女の死罪は免れません」
レミールの聞くに堪えない妄言を、判事の1人がばつさり切り捨てる。

「仮に、第3文明圏の法……国際法などは存在しませんから、社会通

念と呼ぶべきでしょうか？ その下で裁判を行っても、罪状は変わらないと考えます」

「は……？ なにを言って、いる？ 私はパーパルディア皇国の皇族にして……」

「第3文明圏では、強者は弱者を虐げ、奪うことは当然」と言われているそうですね。その考えに基づくならば、大国である日本が武装勢力を滅ぼしたのは、当然の権利を行使しただけではないでしょうか？」

その言葉に、頭を殴られたかのような衝撃を受けるレミール。

弱肉強食の法。その強者側として生まれ、それを当然として生きてきたレミールには、弱者の立場に回ることなど想像したこともなかった。

故に、判事の言葉をひどく理不尽かつ横暴な論理だと感じたレミールは反論を試みようとする。自身が今までその理不尽かつ横暴な論理を振りかざしていた過去を忘れて。

「まして日本国は海賊の襲撃を受けたので、近隣諸国を脅かす海賊勢力を討伐したに過ぎません。これは自衛の範疇に入ります」

反論を口にする前に、再び繰り出された判事の口撃に口をつぐむ。

近代化されていないレミールの脳でも、殴ったら殴り返されるのは当然という理屈は理解できた。

これまでなら、既にないパーパルディア皇国の威光を盾にした反論をしようとしただろう。だが弱者の側に回ったという衝撃から抜け出せていないレミールは、その考えが浮かばなかった。

「それでは最後の判決が下りましたので、戦時裁判はこれにて閉廷いたします」

レミールは燃え尽きたような状態で、両脇を固められて連れていかれる。

ドアの向こう側に消えても、甲高い耳障りな声が聞こえてくることは、もうなかった。

——裁判が終了したその日のうちに、刑は執行された。

死刑判決を受けた者たちは銃殺刑に処され、遺骨は近隣の森に分散して散骨された。

後年、公開された資料によれば散骨の際かけられた言葉は、

『人は人の手によって、獣は獣と虫によって土に還る』
と記録されている。

海賊掃討任務の成功が大々的に報じられる日本本土の首相官邸。

総理以下閣僚の面々は世間同様、沸き立つことなく淡々と戦後処理の報告を受けていた。

「海賊の生き残りを集めたパールネウス独立委員会は無事、発足しました。人材がやや不足していますが、それは我が国から派遣される政治顧問団と官僚団で補えます」

初手で政府機関を吹き飛ばした結果、政治家など政府関係者の人口が悲惨なことになっていったパールディア皇国。そこから絶滅危惧種となった対象をリクルートし、何とか形にしたのがパールネウス独立委員会である。

帝政以前の共和国時代よりさらに面積を減らした領土の統治すらぎりぎりだったため、不安定化を望まなかった日本から命令権を持ったチームが派遣されることとなった。

「なお、獲得したエストシラント、デユロ両港ですが、工事は順調。来年には空母打撃群も受け入れ可能になる見通しです」

「それは結構なことだ。これで本土から西と南は安泰。残るは北と東だな」

「そちらについては後で説明致します。……大陸北部の新独立国家群は我が国に好意的であり、南部の旧海賊勢力に強い敵愾心を抱いています。手綱を握っておけば、パールネウスに対する良い抑止力となるでしょう」

クーズ共和国を始めとする、パールディア皇国元属領の国々は、親日反パ国家として再出発している。

独立戦争時の恩とODA等の経済的首輪で暴発しないよう抑えつ

けて、パールネウスがいらぬ野心を抱かないための重しにするのだ。
「ロデニウス大陸に続き、ファイルアデス大陸の大部分が日本の市場となるのか。投資したかいがあったな」

「まだまだ投資は必要ですし、出費はかさみますよ。そこをお忘れなく」

景気のいいことを言う経済産業大臣に財務大臣が釘を刺す。

戦時国債発行までは踏み切っていないとはいえず、余裕があるわけではない。無駄遣いは避けてほしいのが彼の本音だった。

「大陸の今後はそれでいいとして、だ。北と東の防衛に関して説明してくれないか？」

「はい。北は反日的国家はあれど、脅威となる勢力は確認されていません。各勢力が反日で団結しないよう裏から手を回します」

ちなみに北部方面における反日国家の筆頭がリーム王国である。

「北に関して、外務省からひとつご連絡が。トールパ王国という国が、我が国に援軍を求めています」

「援軍？ そのトールパ王国という国とは、国交を持っていなかったはずだが？」

「そうなのですが、国防軍の活躍を聞いて、アルタラス王国経由でコンタクトをとってきました。特使の態度からして、なかなか切羽詰まっているようですね」

「外務省からの情報に捕捉しますと、トールパ王国は北にあるグラメウス大陸と地続きでつながっているのですが、そこから魔王を名乗る知的生命体が魔物を引き連れて攻め込んできたらしいのです」

「ま、魔王か……。そうだな、ファンタジー世界なものな。魔王がいともおかしくはないな、うん」

突如飛び出してきた魔王というワードに困惑してしまう総理。

ワイバーンや魔法といった単語を耳にするようになって、ファンタジーに対する耐性はできていると思っていたが、総理自身が考えるほど慣れていなかったようだ。

「魔王……個体名ノスグーラは監視兼防衛拠点、世界の壁を突破してトールパ王国へと侵攻。既に街が1つ陥落したことを受けて、軍の動

員と傭兵の募集を開始したようですが、それだけではノスグーラには勝てないと判断しているようです」

「そこで我が国に援軍の要請か……。海賊勢力には打診しなかったのか？」

「したようですが、断られたようです。なんでも、奴隷の献上を拒否したからだとか」

なお、この情報は『パーパルディア皇国を僭称する武装勢力の悪行』の1つとして宣伝されている。

「他に頼りになる国が近隣になく、そうこうしているうちに我が国による海賊勢力討伐が起き、援軍を求めることを決めたようです。派手な武力行使をロデニウス大陸でしかやっていなかったため、向こうに、実力が伝わっていなかったようです」

「うーむ、それでまともな情報収集もできない蛮族国家に舐められ、絡まれたら面倒だな。さすがに列強を潰した日本を軽んじることはないと思いたいが……。それで援軍の件だが、見返りはなんだ？ さすがに無報酬では派遣などできんぞ」

「そこが少し問題でして」

報告者は苦虫を噛み潰したような顔で話を続ける。

「どうも特使の言い分では、魔王の復活は世界の危機であり、報酬を求められるとは考えていないようなのです」

「……無報酬では国民を納得させられんぞ。クワ・トイネやクイラなら友好国のためと言えるが、トーパー王国とは国交もない」

「世界がこんな状態では国際貢献と言っても、国民はついてこないでしょう」

「二応、グラメウス大陸の調査の足掛かりとしては使えそうですが……戦後処理と次の戦争への備えに忙しい今は魅力が薄いですな」

差し出せる権益もなく、助けても有形無形問わず国益は乏しい。

この条件で助けに行くのは個人までで、国家がまず動くことはないだろう。

「我が国は国民を納得させられる利益がない戦いには加勢しない。援軍を望むのなら相応の利益を提示してほしい……。そう、特使に伝え

てくれ」

「分かりました。それと、その際特使に少々『助言』しても？」

「構わんよ。どんな形であれ、対価を支払うなら国民を説得できるだろう」

トーパー王国については総理が了承した内容で対応していくことが決まった。

「話を戻しまして、東の国防については問題ありません。近くに我が国の脅威となりえる勢力は存在せず、潜在的脅威と睨んでいる勢力は海を隔てた先です」

「衛星写真にあったという、南東の文明が発達している形跡のある島については？」

「それについて、興味深い物が発見されました。これを見て下さい」

差し出された写真には、回転翼が取り付けられた空飛ぶ木造船が写っていた。

「……子供のころに遊んだゲームに、こんなのが登場していたな」

「総理もでしたか。ただ対空兵装はこちらが上のです。こちらの写真をご覧ください」

進行役が先ほどとは別の、ズームアップされた写真にはいくつか注釈がついている。

「この飛行物体……国防省では飛空船と呼んでおりますが、ご覧の通り、第3文明圏では最も進んでいた海賊の戦列艦には見られなかった、魔法を用いた兵器が複数確認できます」

「……調査の必要があるな。それらの種類と性能次第では、レシプロ機では勝てないかもしれん。今後の武器売却にも影響が出る」

「パールニュースが片付き次第、調査用ドローンで情報収集を始める予定です。魔力計測器の増加試作品を積んだ新型で、海軍は既に準備を始めています」

この手の無人機を使った情報収集は空軍が行うことが多いが、今回は相手が海をはさんで3000km以上離れた島国なので、船舶というプラットフォームを有する海軍が担うこととなった。

「こちらに向かつてくるなら、何かしらの兆候は掴めると思うが……念には念を入れておこう、外務大臣、国防大臣」

「はい」

「クワ・トイネ、クイラ両国にこの国の情報を伝えるときにも、国防軍と共同で南東海域での哨戒、迎撃訓練の定期的実施を提案したまえ」

魔法という、未だ未解明な部分の多い技術を総理は侮つてはいない。

科学では実現不可能、あるいは困難なことを魔法で可能とし、精神的奇襲を受けることを真剣に恐れている。

「ミリシアル内陸部からレーダー波を検知したと報告があります。ガハラ神国にもレーダー波を発する生物がいますし、アニユンリール皇国もレーダーを実用化しているようなので、魔法文明国にも電子戦の概念はあると考えるべきでしょう」

「コア魔法……核兵器への対策も進めなければなりません。シエルター以外にも大量破壊兵器への備えは必要です」

日本本土を含む日本領の大部分には、試練の間に造られた核戦争に備えたシエルターがあり、仮に東京に核攻撃を受けても政府機関がマヒしないようになっていいる。

「魔法に関する研究も進めなくてはな。脅威なのはもちろんだが、この飛空船を使うようになれば、いろいろと使い道がありそうだ」
「すでに官民一体となって魔法技術の研究を進めております。飛空船は現物と技術資料がないので厳しいですが、ミリシアルにも空飛ぶ円盤のような兵器が確認されていますので、いずれは我々も手にできるかと」

日本の最高指導者たちの会議は休むことなく続く。